

阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.109
2009

2

月号

トピックス

第8回大阪大学フォーラムをサンフランシスコで開催

第2回京都大学・大阪大学・神戸大学連携シンポジウム開催

クローズアップ

日本語日本文化教育センター

Center for Japanese Language and Culture



大阪大学広報誌

2009 2月号 No. 109

目 次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
キャンパスニュース	20
ナウスPECIAL	44
表 彰 等	46
討 報	49
インフォメーション	52
海外拠点だより	56
交流協定大学	58
クラブ&サークル	59
トピックス	60



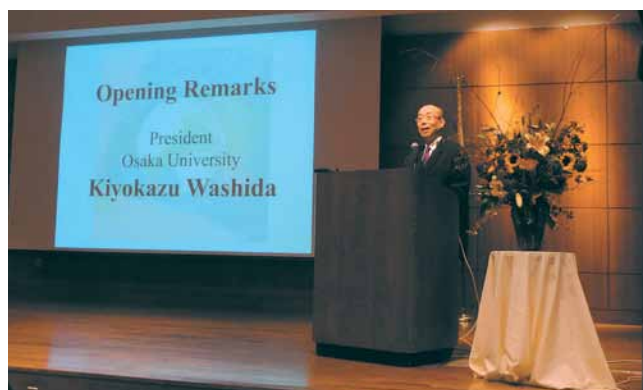
表紙写真：書斎（適塾）

緒方洪庵が開いた学塾で大阪大学の源流でもある適塾は、昭和51年から実質5年を掛けて解体修理を行い、修復を機に広く一般に公開しています。

1階の受付の横にある中庭を通ると、その奥には写真の書斎の他に、応接間、客座敷、家族部屋があり、客座敷の縁側からは前栽を眺めることができます。2階には女中部屋、ツーフ部屋、塾生大部屋があり、各部屋には本学及び適塾記念会が所蔵する資料を展示しています。

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第8回大阪大学フォーラム



総長挨拶



第2回京都大学・大阪大学

大阪大学、京都大学及び神戸大学の3大学が連携し、世界に通用する高度人材育成行い、関西の知的創造拠点を形成することを目的とした国際シンポジウム、「第2回京都大学・大阪大学・神戸大学連携シンポジウム - 関西から世界へ：三大学連携による「知」の創出と発信 - 」が、1月14日(水)大阪国際会議場において開催され、大学、企業関係者や経済界等



をサンフランシスコで開催

大阪大学では、平成13年度より研究者の優れた研究活動等を広く海外に発信するため、毎年テーマを厳選し、大阪大学フォーラムを開催しています。

2008年は、大阪大学とグローバルCOEプログラム（GCOE）「生命環境化学グローバル教育研究拠点」の主催により、米国の太陽エネルギー利用研究・開発に関する2つの大型プロジェクトである「Powering the Planet」並びに「HELIOS」と連携し、生命環境化学をテーマとし、サンフランシスコにおいて行いました。

阪大からはGCOEの研究者、米国側からはこれらのプロジェクトに関するカリフォルニア工科大学（Caltech）マサチ

ューセツ工科大学（MIT）、カリフォルニア大学バークレー校（UC Berkeley）などの主要研究者が、12月8日（月）から10日（水）の3日間にわたり、第一線の研究活動の成果を披露しました。

参加者は、これらの大学、研究機関を中心に、約120名ののぼり、活発な質疑応答と熱心な議論が行われました。

今回のフォーラムにより、大阪大学の最先端の研究を発信することができたとともに、地球環境エネルギー問題に取り組む日米の3プロジェクトが連携する絆の形成にも資することができたと認識しています。



・神戸大学連携シンポジウム開催

から約320名が参加しました。

昨年2月に開催された第1回（幹事校：大阪大学）に引き続き第2回目となる今回は、京都大学が幹事校となり、「都市と地域の防災・減災～自助・共助・公助そして企業の「産助」～」をテーマに行われました。シンポジウムは、京都大学松本 紘総長、大阪大学鷲田清一総長、神戸大学野上智行学長の三大学の総長・学長挨拶から始まり、尾池和夫前京都大学総長、サルパノ・プリセーニョ国連国際防災戦略事務局長、カスリーン・ティルニーコロラド州立大学自然災害センター所長、泉田裕彦新潟県知事及び太田賢司シャープ株式会社取締役専務執行役員技術担当各氏の防災の専門家等による講演が行われました。後半には、「企業の事業継続力を被災地の復興に生かす」をテーマとし、コーディネーターに河田恵昭京都大学教授、パネリストに井戸敏三兵庫県知事、正司健一神戸大学教授、貫名英一コクヨファニチャー株式会社代表取締役社長、そして鳴海邦碩大阪大学名誉教授を迎えてのパネルディスカッションが行われ、活発な討議が行われました。



日本語日本文化教育センター

Center for Japanese Language and Culture

日本語日本文化教育センター長 奥 西 峻 介

■ 本センターの理念

今日の日本は国際社会の支援と協力で繁栄しているのですから、国際社会に対して応分の貢献をすることは人類の一員として当然の義務だと思います。そのような貢献の一つが、留学生の教育です。私たちが得た学術研究の成果を広く世界の人々に還元しようとするものです。

ところで、教育とは知識の直接の伝授ではありません。私たちは、それ以外に多くの事柄を間接的に習得して成長します。その環境にあることによって学ぶことも多いのです。今日の日本は、その条件の中で成り立ってきました。単に欧米の科学技術が移設された結果ではありません。よって、日本語や日本の社会あるいは文化の知識を得ることは、専攻分野のいかに拘わらず、留学目的の本質的な一部だと思います。

ところが、近代、学習や教育の対象になってきたのは欧米の言語ないし文化ばかりでした。しかも、その本来の担い手と学習者の関係は、文化や政治の発信者と受容者の関係でした。

日本語は、学習者が既得の知識から想像する「外国語」、

すなわち欧米語とはずいぶん異なった印象を与えます。日本の文化と言っても、地球的な規模で普及したものはほとんどありません。日本語や日本文化の教育においては、かつての外国語や外国文化の教育の経験が必ずしも役に立たないのです。その教育は、いささか大げさに言えば、人類にとって未知の試みです。

このような日本語や日本文化の現実、日本留学の欠点のように言われることがあります。しかし、欧米以外の国で、色んな意味で近代化したのは日本ぐらいである歴史に鑑みれば、その事実だけでも日本を体験することに意味があると思う人も少なくないでしょう。

私たちはそのように考え、留学生に対する日本語や日本文化の教育にあたり、かつ、そのための研究を行ってきました。そして、近年、諸外国の中等教育において日本語教育が増加し、高等教育において日本学専攻が充実してきたのを見ると、私たちの考えも強ち的外れではないと思えてきます。



日本語日本文化教育センター棟

■ 本センターの沿革

日本語日本文化教育センターの歴史は、1954年に旧大阪外国語大学外国語学部設置された留学生別科に遡ります。以来、国費外国人留学生に対する日本語・日本文化教育の拠点として、我が国の留学生政策の一翼を担い続けてきました。

1991年からは国費学部留学生の予備教育を開始し、東京外国語大学留学生日本語教育センターとともに国費学部留学生予備教育機関として中核的な役割を果たしています。

また、1985年からは国費日本語・日本文化研修留学生（以下、日研生）に対する教育プログラムを開始し、日本語や日本文化を専門とする留学生への教育プログラムの開発と充実に努めてきました。1995年からは、「日本語・日本文化研修留学生問題に関する検討会議」を毎

年開催し、日研生プログラムを持つ各大学の参加の下に、全国的な規模での留学生教育の向上に貢献しています。

日研生プログラムでの教育の蓄積に基づいて、2000年より旧大阪外国語大学の短期留学生プログラム（通称Mapleプログラム）に対して日本語コースを提供していましたが、現在では大阪大学Mapleプログラムとして引き継がれています。

2000年からは、旧大阪外国語大学大学院言語社会研究科「日本語・日本文化特別コース」において、大学院における日本語・日本文化教育にも携わるようになりました。現在でも、言語文化研究科言語社会専攻において、同コースを継承する「日本語・日本文化専修コース特別プログラム」の運営の中心となっています。

■ 教育プログラム

日本語・日本文化研修留学生プログラム

日本語・日本文化に関する分野を専攻する学部レベルの国費外国人留学生を対象とした1年間のプログラムです。

2つのコースから成り、研修コースでは様々な学内外活動に参加することを通じて日本語能力を高め、日本語・日本文化の知識を身につけることを主眼にしています。また、研究コースでは、日本語、日本語教育、日本文学、日本文化などの様々な専門に関する研究を行うことを目的としています。



四国こんびら歌舞伎大芝居鑑賞



物理実地見学（SPRING-8）

学部留学生プログラム

日本の大学で学部教育を受ける国費学部留学生を対象とした1年間の予備教育プログラムです。

このプログラムには、文学・教育学・経済学・政治学といった人文・社会系、および、工学・理学といった理科系を専門とする学生が所属しており、その日本語レベルは未習から上級まで様々なレベルに渡っています。そのような学生たちの次大学への橋渡しをするため、それぞれの日本語能力に合わせた授業とともに、政治経済、日本史、数学、物理学、化学といった専門科目を提供して、進学後の学習・研究に必要な教育を行っています。

Maple プログラム

このプログラムは、文部科学省および日本学生支援機構（JASSO）が推進する短期留学特別プログラムの一つであり、大阪大学が国際交流協定を結んでいる海外の大学からの留学生の中でも、特に日本語・日本文化分野での教育を希望する者に対して提供されています。

このプログラムは、日本語・日本文化について学ぶ「日本研究科目」、日本とそれ以外の地域の文化を比較対照して学ぶ「比較研究科目」、様々な学外研修や日本人学生との共同学習を行う「日本語日本文化専門演習」から成る【専門科目】と、日本語能力の向上を図る【日本語科目】という2つの柱から成っています。



扇子作成体験

■ 大学院教育への貢献

本センターは、2000 年から開始された旧大阪外国語大学の「日本語・日本文化特別コース」において、大学院における日本語・日本文化教育にも携わるようになりました。このプログラムは、留学生に特化した日本語・日本文化の大学院レベルでの教育を行うという、全国的にも類を見ないユニークなものです。その後、2006 年には「国費外国人留学生（研究留学生）の優先配置を行う特別プログラム」に採択され、現在、言語文化研究科言語社会専攻海外連携コースにおける「日本語・日本文化専修コース」として、引き続き大学院教育を行っています。2008 年 10 月現在、修士号取得者 62 名、博士号取得者 19 名を輩出しています。

■ 出版物

『教材叢書』

本センターでは、授業で使用するための日本語教材として、1990 年度より 2003 年度まで『大阪外国語大学日本語教材叢書』として 50 タイトルの教科書を刊行してきました。2004 年度からは、第二期となり、現在までに 9 タイトルが刊行されています。



『授業研究』

『授業研究』は、本センターが行う教育に関して、その方法論や教材論を共有し蓄積することを目的として、2003 年に創刊されました。2005 年に実施した外部評価では、教育自体の研究を目的とした紀要は全国的にも類例が希少で先駆的かつ意欲的な取組であるという高い評価を得ました。現在 6 号まで発行されています。



■ 日本語日本文化教育研究会

日本語日本文化の教育に関する研究促進のために、本センターが中心となり、学内外の専門家による「日本語日本文化教育研究会」を組織しています。2005 年 9 月に第 1 回の研究発表会を実施し、現在では、年 3 回の発表会を行っています。研究発表はもちろん、海外からのゲストスピーカーによる講演会の開催、国際シンポジウムへの協力など、様々な側面から研究活動の推進を行っています。

『日本語・日本文化』

『日本語・日本文化』は、旧大阪外国語大学留学生別科時代の 1969 年に創刊され、現在 34 号まで発刊されています。本センターの教員を中心に、日本語や日本文化に関する学術研究発表の場としての役割を果たしています。



『センター広報』

『センター広報』は、旧大阪外国語大学留学生日本語教育センターにおいて 1993 年に創刊されました。本センターの活動を紹介・報告するために毎年 1 回発行されています。

センターホームページでも様々な情報を公開しています。

URL: <http://www.cjlc.osaka-u.ac.jp/>



■ 国際交流

世界の日本語・日本文化教育の充実発展に寄与するという目的のもと、海外日本研究拠点 20 機関との国際的な教育連携ネットワークを構築しています。学生・教員

の交流、教育情報の交換、また、国際シンポジウムの開催による教育研究の進展を図っています。



- | | |
|--------------------------|------------------------------|
| 1. ウィーン大学（オーストリア） | 11. ブカレスト大学（ルーマニア） |
| 2. ルーヴァン・カトリック大学（ベルギー） | 12. ミュンヘン大学（ドイツ） |
| 3. トゥールーズ・ル・ミライユ大学（フランス） | 13. バルセロナ自治大学（スペイン） |
| 4. ナポリ東洋大学（イタリア） | 14. ソフィア大学（ブルガリア） |
| 5. ライデン大学（オランダ） | 15. ヤギェウォ大学（ポーランド） |
| 6. ベルゲン大学（ノルウェー） | 16. カリフォルニア大学バークレー校（アメリカ） |
| 7. チューリッヒ大学（スイス） | 17. リオデジャネイロ州立大学（ブラジル） |
| 8. オックスフォード大学（イギリス） | 18. モナシュ大学（オーストラリア） |
| 9. ロンドン大学（イギリス） | 19. ウェリントン・ビクトリア大学（ニュージーランド） |
| 10. エトベシュ・ロラード大学（ハンガリー） | 20. 香港大学專業進修学院（中国） |



ソフィア大学訪問



ウィーン大学リンハルト教授と

おくにし・しゅんすけ

プロフィール

1975年、京都大学文学研究科博士課程満期退学。大阪外国語大学外国語学部助手などを経て、現在、日本語日本文化教育センター教授、センター長。専門は、比較民俗学。

役員室だより

2009.2 Vol.28

大学の動き

平成21年度新規概算要求内示

平成21年度新規概算要求事項については、昨年の6月19日に文部科学省に提出、8月末に文部科学省から財務省へ概算要求の結果、12月末に予算内示がありました。あわせて平成20年度補正予算の内示もありましたので報告します。

平成21年度 概算要求事項内示内訳

部 局 名	事 項 名	備 考
【特別教育研究経費】（「特別教育研究経費」の事項名称における太斜字は継続分を示す。）		
○学部・大学院組織等整備		
医 学 系 研 究 科	大学院「連合小児発達学専攻」の設置	入学定員10名
医 学 部	医学部入学定員5名増	
○教育改革		
薬 学 研 究 科	高度専門薬学教育システムの確立(5-4)	
臨床医工学融合研究教育センター	臨床医工学・情報科学融合領域の人材育成教育プログラムの開発(5-4)	
コミュニケーションデザイン・センター	コミュニケーションデザイン教育事業の推進 - コミュニケーションデザイン・センター - (11-5)	
グローバルコラボレーションセンター	国際協力・共生社会のための実践的教育改革事業 - グローバルコラボレーションセンター - (9-3)	
サイバーメディアセンター	高度外国語教育全国配信システムの構築(5-3)	
21世紀情報学・コミュニケーションデザイン・センター	社会連携活動を通じたインターンシップの推進(2-1)	
サイバーメディアセンター	大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業(4-1)	
世界言語研究センター	社会人を対象とした学士レベルの外国語教育プログラムの提供(3-1)	
基礎工学研究科・理学研究科	ナノサイエンス総合デザイン力育成事業の推進 - 多重ネットワーク型産学・国際連携人材育成 - (4-1)	新規
学際融合教育研究プラットフォーム	学際融合教育事業の推進 - 学際融合教育研究センターの構築 - (5-1)	新規
医学部附属病院	医療安全能力向上のための効果的教育・トレーニングプログラムの開発 - 医療安全学の構築と人材育成 - (5-1)	新規
	社会人教育支援経費	特別支援事業から組替え
○研究推進		
超高压電子顕微鏡センター	超高压電子顕微鏡を中核とする新しい病理診断法の研究創出事業(5-5)	
ラジオアイソトープ総合センター	全学放射線取扱者研究推進支援事業(5-5)	
極限量子科学研究センター	極限ナノ物性研究創出事業(5-5)	
科学教育機器リノベーションセンター	革新的研究教育基盤機器開発整備事業(5-2)	
世界言語研究センター	民族紛争の背景に関する地政学的研究 - 中央アジア、アフリカ、パレスチナ、旧ユーゴの言語・文化の研究 - (5-3)	
微生物病研究所	感染症対策研究連携事業(感染症国際研究センター) (10-5)	
産業科学研究所	附置研究所間連携事業(新産業創造物質基盤技術研究センターによる中核的研究拠点間アライアンス実現に向けたポストシリコンの戦略的研究) (5-5)	
蛋白質研究所	生命の秩序化を担う膜蛋白質の構造・機能メカニズムの解明を目指す国際フロンティア(膜蛋白質研究国際フロンティア) (5-5)	
社会経済研究所	中国香港科学技術大学実験ビジネス研究センターとの連携による経済実験プロジェクト(5-5)	
接合科学研究所	全国共同利用附置研究所連携事業(金属ガラス・無機材料接合技術開発拠点) (5-5)	
○共同利用・共同研究拠点		
核物理研究センター	偏極標的を用いたハドロン物質研究推進事業(5-5)	
レーザーエネルギー学研究センター	高出力レーザーによる高エネルギー密度状態の科学の開拓(5-4)	
レーザーエネルギー学研究センター	相対論光科学研究創出事業(5-5)	

部 局 名	事 項 名	備 考
○連携融合事業		
理 学 研 究 科	超分子におけるストレスと共生(5-4)	
医 学 系 研 究 科	「子どものこころの発達研究センター」による教育研究事業(6-4)	
工 学 研 究 科	アトミックテクノロジー創出事業(4-4)	
金融・保険教育研究センター	新領域分野「金融・保険科学」に関する文理融合型教育プログラムの開発・金融・保険教育研究センター教育事業-(5-4)	
基 礎 工 学 研 究 科	量子機能融合による未来型材料創出事業・スピントロニクス、オプトロニクス、モレクトロニクス、 クオントロニクスの融合による未来型機能材料創出事業-(5-1)	新規
○特別支援事業		
	教育研究活動活性化経費	
	留学生受入促進等経費	
	障害学生学習支援等経費	
	臨床研修体制等充実経費	
	厚生補導特別経費	

【病院特別医療機械設備（長期借入金対象）】		
医 学 部 附 属 病 院	総合手術支援システム	
医 学 部 附 属 病 院	周産期集中治療システム	
医 学 部 附 属 病 院	脳磁計測システム	
医 学 部 附 属 病 院	検体検査システム	
歯 学 部 附 属 病 院	放射線治療システム	
歯 学 部 附 属 病 院	X線CT撮影装置	

(20年度1次補正)

国立大学法人施設整備費補助金		
太陽エネルギー化学研究センター	太陽エネルギー変換および光機能材料・デバイスの構築・特性評価システム	
医 学 系 研 究 科	医学部定員増に伴う学生教育用施設整備 【実習室改修(換気設備)】	
国立大学法人設備整備費補助金		
医学系研究科・大学教育実践センター	医学部定員増に伴う学生教育用設備整備 【学生実習用設備】	

(20年度2次補正)

国立大学法人施設整備費補助金		
理 学 研 究 科	質量分析システム	
核物理研究センター・理学研究科	バイオン捕獲システム	

平成20年度補正予算案及び平成21年度予算案における、大阪大学の国立大学法人等整備の実施予定事業

■継続事業(3件)

- 21年度:(豊中) 学生交流棟施設整備事業(PFI事業13-5)
- 21年度:(吹田1) 研究棟改修(工学部)施設整備等事業(PFI事業13-4)
- 21年度:(吹田) 研究棟改修 期(産研)【後年度】

■新規事業(8件)

- 20年度1次補正:(吹田) 講義棟改修(工学系)
- 20年度1次補正:(吹田) ライフライン再生事業
- 20年度1次補正:(豊中) 文法経本館改修 期
- 20年度1次補正:(豊中) 学生会館改修
- 20年度2次補正:(箕面) 研究講義棟A棟改修
- 20年度2次補正:(豊中) 国際交流会館改修
- 21年度:(吹田) 本館改修(微研)【前年度】
- 21年度:(医病) 基幹・環境整備(空調設備更新等)

各室の検討状況

総合計画室

第二期中期目標・中期計画の策定

第二期中期目標・中期計画については、昨年12月に次期中期目標・中期計画検討ワーキングでまとめた第一次案に対し各部局等からの意見を求めました。現在、この意見を踏まえた修正作業を行っており、3月には第二次案を策定し、再度、各部局等に意見照会を行う予定にしております。

学内措置による組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による組織整備として、2月の役員会で次の事項が承認されました。

- ・産業科学研究所の改組（平成21年4月1日）
- ・大学教育実践センター教育実践研究部の改組（平成21年4月1日）
- ・医学系研究科附属ツインリサーチセンターの設置（平成21年4月1日）

工学部研究棟改修整備事業工事完了

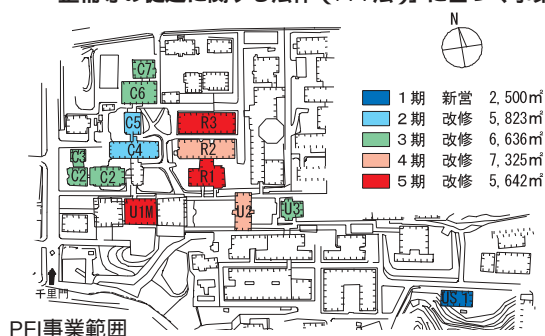
平成17年度よりPFI事業として整備を進めてきた吹田キャンパスの工学部エリアの工事が完了しました。

第1期で整備されたUS1棟は、競争的資金による時限プロジェクト等に利用されます。オープンラボの頻繁な移転にも容易に対応できるよう設備バルコニーを設け、間仕切り壁は設置・撤去が容易なパーティションとしています。

第2期から第5期は化学系、材料系、講義棟などの改修整備であり、内部空間の変容性にも対応可能な耐震補強整備とともに、U2棟での1階ピロティー空間やU1M棟での屋上など教職員・学生の交流スペース空間が整備されました。

整備の完成した建物から順に維持管理業務を開始しており、清掃業務では性能発注であることから、事業者提案により効率的に実施されており、良好な状態に維持されています。平成21年1月からは運営業務も開始しています。なお、工学研究科事務部はU1M棟へ本移転しました。

PFI事業・事業者の資金、経営能力及び技術能力の活用を図ることを目指した「民間資金等の活用による公共施設等の整備等の促進に関する法律（PFI法）」に基づく事業。



1期 US1 新営



4期 U2 コミュニケーション・プラザ



5期 U1M 屋上



4期 R2 改修

情報系先端融合科学研究棟が完成

吹田キャンパスの情報系先端融合科学研究棟が完成しました。情報技術をイメージさせる「ライン」を表現したシャープな縦基調のファサードに大学の歴史とアカデミックな雰囲気を感じさせる基壇を配置した1期（情報系総合研究棟）の立面形を踏襲しています。北面についてはバイオと融合を意識して、6・7階を開放性のあるデザインとし、1階玄関部に横長の庇を設けることにより正面性のある構成としています。平面構成では1階の1期棟と結ぶ位置にコミュニティー空間を提供し、各フロアでは居室だけではなく、廊下、階段及びEVホールから自然光を取り入れ人々が集う光の空間を演出しています。



北側外観(左側は1期:情報系総合研究棟)



1階コミュニティー空間



情報系先端融合科学研究棟
構造：鉄骨造
規模：地下1階・地上7階
延床面積：6,599m²
着工年月：平成19年9月
完成年月：平成20年12月

教育・情報室

平成21年度政府予算案と大学教育改革の支援

昨年末に閣議決定された政府予算案では、大学教育改革支援の充実等のために、総額で705億円（対前年度25億円増）が計上されました。今後、各プログラムの新規公募が発表されますので、応募を予定される関係部局では検討・準備をお進めください。

【主なプログラムの予定額】

- ・大学教育・学生支援推進事業〔新規、「質の高い大学教育推進プログラム」と「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」を統合〕(110億円)
- ・グローバルCOEプログラム〔増額〕(342億円)
- ・組織的な大学院教育改革推進プログラム(57億円)
- ・大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム〔拡充〕(60億円)
- ・国際化拠点整備事業(グローバル30)〔新規〕(41億円)
- ・周産期医療環境整備事業〔新規〕(17億円)
- ・看護職キャリアシステム構築プラン〔新規〕(2億円)
- ・大学病院連携型高度医療人養成推進事業(16億円)
- ・がんプロフェッショナル養成プラン(20億円)
- ・先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム(9億円)
- ・産学連携による実践型人材育成事業(5億円)
- ・専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム(6億円)
- ・社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム(18億円)

平成 21 年度大学院高度副プログラム

「大学院高度副プログラム」は、大阪大学独自の学際融合的な大学院教育プログラムとして、全国に先駆けて実施されています。たとえば博士前期課程の大学院生が、専攻の修了要件の 30 単位に加えて「高度副プログラム」の 8 単位以上を履修して修了した場合、総長名の修了認定証が与えられます。この制度は、社会人向けの「科目等履修生高度プログラム」とともに平成 20 年度に開始し、既に 500 名以上の学生が履修しています。

平成 21 年度に提供されるプログラムが下表の通り決まりました。初年度に比べ、大学院高度副プログラムは 6 件、科目等履修生高度プログラムは 1 件増加します。提供されているプログラムの多くは、各種の GP、特別教育研究経費、科学技術振興調整費などの資金により開発された新しい教育プログラムです。今後も全学から、より多くの先進的プログラムが提案されることを期待します。

平成 21 年度大学院高度副プログラム

整理番号	プログラム名称	提案部局	連携部局	受講対象者
1	まちづくりデザイン学	工学研究科	CSCD	M・D
2	環境リスク管理学	工学研究科	-	M
3	応用自然言語処理理論と技術	言語文化研究科	-	M・D
4	グローバルリーダーシップ・プログラム	国際公共政策研究科	-	M・D
5	IT Spiral	情報科学研究科	-	M1
6	高度情報ネットワーク実践スペシャリスト	情報科学研究科	-	M
7	臨床医工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム：専門科	臨床医工学融合研究教育センター	医学系、歯学、薬学、工学、基礎工、情報、実践、CSCD	M・D
8	臨床医工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム：高度職業人育成科	臨床医工学融合研究教育センター	経済、医学系、薬学、CSCD	[クリニカルリサーチプロフェッショナル育成コース] M・D
				[分子イメージング創薬プロフェッショナル育成コース] M・D
				[予測社会医学プロフェッショナル育成コース] M・D
9	コミュニケーションデザイン	CSCD	文学、人間	M・D
10	金融・保険	金融・保険教育研究センター	経済、理学、基礎工、情報	M・D
11	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム（博士前期課程高度学際教育）	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合、超高圧、極限、太陽	M
12	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム（博士後期課程社会人特別選抜）	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合、超高圧、極限、太陽	D
13	サステナビリティ学	サステナビリティ・サイエンス研究機構／サステナビリティ・デザイン・センター	人間、法学、経済、理学、医学系、工学、基礎工、国際、CSCD	M
14	医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養	医学系研究科(医科学専攻)	-	M
15	ERASMUS MUNDUS 英語授業・現代日本論	文学研究科	-	M・D
16	グローバル共生	GLOCOL	人間、法学、言文、国際、CSCD	M・D
17	人間の安全保障・社会開発	GLOCOL	人間、経済、医学系、工学、国際、実践、CSCD	M・D
18	司法通訳翻訳論	GLOCOL	人間、法学、言文	M・D
19	インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践	留学生センター	言文	M・D
20	高度がん医療人材育成プログラム	医学系研究科（保健学専攻）	薬学、核物	M・D

平成 21 年度科目等履修生高度プログラム（主に社会人対象）

整理番号	プログラム名称	提案部局	連携部局
1	まちづくりデザイン学	工学研究科	CSCD
2	環境リスク管理学	工学研究科	人間、経済
3	金融・保険	金融・保険教育研究センター	経済、理学、基礎工、情報
4	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム（社会人教育）	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合、超高压、極限、太陽
5	ERASMUS MUNDUS 英語授業・現代日本論	文学研究科	-

学際融合教育研究プラットフォームの強化・拡大

大阪大学では、従来の学問分野に基づく専門教育の一層の充実を図る一方、上記の大学院高度副プログラムなどを通じて、部局横断的・分野横断的な学際融合教育を積極的に展開する計画です。これを通じて、新しい専門性や高度の「教養」、広く複眼的な視野、自由なイマジネーションやコミュニケーション力、デザイン力やネットワーク構成力、真正の国際性などを備えた研究者や高度専門職業人を育成しようとしています。

そのため、大学院生が希望すれば主専攻に加えて選択可能となる「副専攻」を、大学院高度副プログラムの発展形態として展望しています。こうしたことを実現し、教育制度や情報環境や支援体制を整備するためには、現在の高度副プログラムを支えている学際融合教育研究プラットフォームを強化し拡大することが必要です。そこで、特別教育研究経費（教育改革）「学際融合教育事業の推進——学際融合教育研究センターの構築」（平成 21 年度から 5 年間）を概算要求し、これについて文部科学省から予算内示を受けました。本年 4 月に現在の学際融合教育研究プラットフォームを「学際融合教育研究センター」として改組し、新しい教育のための制度と環境と支援体制を整えていく予定です。

教育関係の概算要求

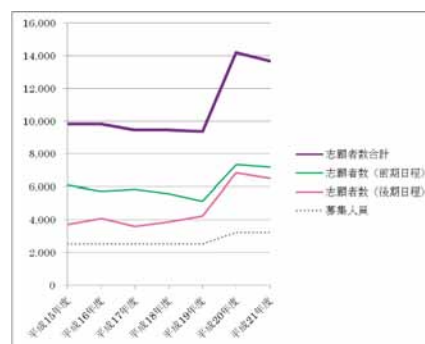
平成 21 年度特別教育研究経費（教育改革）として新規に認められた概算要求は、上記の「学際融合教育事業の推進——学際融合教育研究センターの構築」のほか、「ナノサイエンス総合デザイン力育成事業の推進——多重ネットワーク型産学・国際連携人材育成」（基礎工学研究科・理学研究科）や、「医療安全能力向上のための効果的教育・トレーニングプログラムの開発——医療安全学の構築と人材育成」（医学部附属病院）などです。

継続要求分は、コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）、グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）、臨床医工学融合研究教育センター、サイバーメディアセンター、世界言語研究センターなどの 8 件が認められました。教育改革のための平成 21 年度特別教育研究経費は、予算額・件数など大阪大学が全国でもトップクラスとなります。今後も本学において、個性ある優れた教育が推進されるようご尽力をお願いします。

学部入学試験

平成 21 年度の個別学力検査等（前期日程）試験が 2009 年 2 月 25 ～ 26 日、後期日程試験が 3 月 12 ～ 14 日に行われます。大阪大学の 11 の学部（募集人員 2,557）の今年の志願者総数は 13,709 で、昨年に続いて全国立大学の中で最も多くなりました。

平成 19 年度秋の大阪外国語大学との統合以降、右表のように志願者が大幅に増加しました。入試業務の負担は増大していますが、少子化の進行と大学進学者の減少が言われる中でより多くの優秀な学生が大阪大学を目指すことは、たいへん重要です。教職員のご協力をよろしくお願いします。



大阪大学への志願者数の年次推移

就職状況等の把握

大阪大学の学生が、教育を終えた後社会の中でどのような活動に従事しているかは、大学が果たすべき最も重要な役割としての人材育成の成果について判断する上できわめて大切です。また、社会が個々の大学を評価し受験生が志望大学を決める際にも、最も大きな決定要因の一つがその大学の卒業生の就職状況です。

学生の卒業後・修了後についての情報を迅速かつ正確に把握するには、指導教員に依存するところが大きくなります。情報が得られなければ成果がないことと同一に扱われ、大学の評価に大きく影響しますので、とくに年度末・年度当初に就職状況等についてキャリア支援課を中心に調査が行われる際には、大学全体としての正確な情報が得られるよう、全教員のご協力をよろしくお願いします。

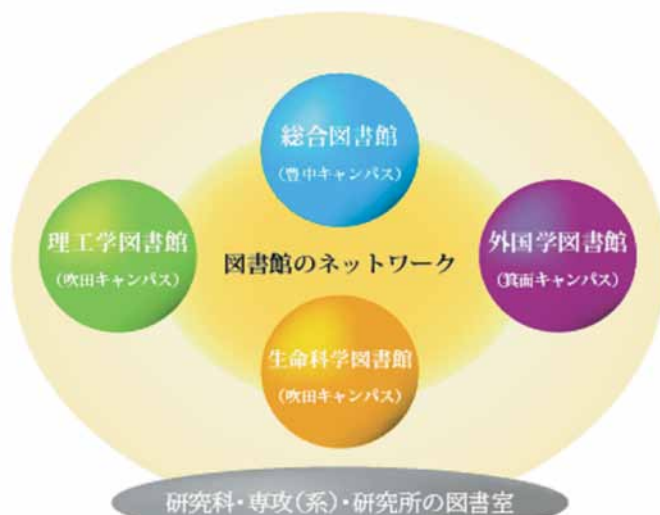
共通教育の重視

大阪大学では、大学教育実践センターで共通教育を通じて行われる教養教育を重視し、教員と学生の双方にインセンティブを与える制度を設けています。

平成20年度前期に優れた授業や教科書などを通じて共通教育に貢献した教員については、「大阪大学共通教育賞」の特別賞2名、受賞者14名と1組を選び、2008年11月6日に教育助成金30万円とともに授与しました。また共通教育における成績優秀な学生50名を選び、2008年12月24日に「共通教育奨学金」20万円の授与式を行いました。

図書館名の変更

大阪大学には4つの図書館があり、それぞれ「本館」「分館」などと呼ばれてきましたが、各図書館の性格やコレクションの内容を分かりやすくするために、平成21年4月から図書館名を変更します。豊中キャンパスの「本館」は「総合図書館 Main Library」、吹田キャンパスの「生命科学分館」は「生命科学図書館 Life Sciences library」、吹田分館は「理工学図書館 Science and Engineering Library」、箕面キャンパスの「箕面分館」は「外国学図書館 International Studies Library」と呼ぶことになります。



名称変更後の大阪大学附属図書館

研究・産学連携室

各種財団研究助成等の学内選考

財団法人昭和報公会 2009 年学術研究助成に対して、研究・産学連携室で編成したワーキングメンバーにより下記のとおり学内選考を行いました。

研究助成等の種類	部局からの推薦数	推薦枠	学内選考結果
財団法人昭和報公会 2009 年学術研究助成	9 名	3 名	医学系研究科 (1 件) 歯学研究科 (1 件) 蛋白質研究所 (1 件)

大阪大学研究懇話会

今回で 14 回目となる大阪大学研究懇話会を、3 月 10 日(火)に中之島センターで開催します。これは、主として関西の企業等に対して大阪大学における研究活動等の情報を提供するとともに、本会を通して企業等から研究者等人材の養成、共同研究の実施など本学に対する要望等を受け、本学の教育研究に反映することを目的としています。

今回のテーマは、「大阪大学の国際連携活動」とし、総長の開会の挨拶の後、国際交流担当理事及び国際連携活動を推進している教員により、本学における取り組みを中心とした内容の講演を行っていただいた後、パナソニック株式会社代表取締役専務の福島伸一様から、「企業の海外における取り組み」としてパナソニックの海外における取り組みをご講演していただきます。

平成 21 年度研究支援推進経費・非常勤研究員経費の配分

研究支援推進経費及び非常勤研究員経費の目的等、配分先及び平成 21 年度配分額は下記のとおりであり、研究・産学連携室では、このたび、関係附属施設、センター及び研究所への配分案を決定しました。

経費名称	目 的 等	配 分 先	平成21年度 配分額
研究支援推進経費	研究プロジェクト等の遂行に必要な技能・技術面での支援者を確保し、本学における学術研究の効果的な推進を図るための経費	関係附属施設、センター及び研究所	78,713 千円
非常勤研究員経費	高度な研究能力を持つ若手研究者を特定の共同研究プロジェクト等に参画させ、本学における研究活動の一層の促進を図るとともに研究者としての人材育成に資するための経費	関係附属施設、センター及び研究所	123,375 千円

JUNBA 2009 開催

1 月 12 日(月) 13 日(火)に、「サンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク (Japanese University Network in the Bay Area ; JUNBA)」のサミット、シンポジウム、テクノロジーフェアが開催されました。

2009 年は、G8 北海道洞爺湖サミットで議論された「環境問題」を一步進め、“Next Step to a Greener Earth” をテーマに、日米の大学と企業等が参加し、環境関係の最先端の研究成果等の発表が行われました。

当室からは、担当理事である西尾室長、正城室員が参加し、本学の取り組み状況等について紹介を行いました。なお、参加機関は、日本の 20 大学を始め、全体で 32 機関を数えました。

評価室

大阪大学教員業績評価基本方針の制定

このたび、「大阪大学教員業績評価基本方針」が次のとおり決定されました。

既に各部局にはお知らせしていますが、平成21年3月末までに部局評価基準を策定の上、部局構成員に周知していただくとともに、平成21年12月を目途として教員業績評価の実施をお願いします。

なお、「大阪大学教員業績評価基本方針Q & A」を作成し、阪大ポータルの評価関係に掲載していますので、ご活用ください。

大阪大学教員業績評価基本方針

平成20年12月22日
役員会決定

【目的】

教育・研究を中心に本学の教員個人が行う諸活動について現状を把握し、適正な評価を行うことによって、大学としての社会的説明責任を果たし、併せて大学運営の改善や教員の教育・研究活動の活性化に資することを目的とする。

【基本方針】

- 1 教員の業績評価は、「教育」、「研究」、「社会貢献（診療を含む）」、「管理運営」の4領域とする。^{注1}
評価は、毎年度行う。^{注2}
評価の対象は、専任の教員（教授、准教授、講師、助教）とする。
- 2 評価は、各部局で部局の分野特性に合わせた評価基準^{注3}を策定し、原則として、部局単位とし実施する。ただし、部局によっては、部局内での単位の細分化を行うことができる。
- 3 評価データについては、「教員基礎データ」を活用するものとし、部局の必要に応じて、その他データを追加することができる。
- 4 評価基準は、部局構成員に対して周知し、評価結果については、各部局の目標・理念に基づき、適切な利用を行うものとする。
評価結果の利用に当たっては、例えば、教育・研究業績による昇給候補者の推薦、教育・研究功績賞受賞候補者の推薦、勤勉手当、部局独自の研究費配分及び海外研修・サバティカル制度の付与等に活用し、教員の諸活動にインセンティブが働くよう配慮する。
- 5 出産・育児・介護等の休業及び育児のための短時間勤務制度の適用等があった者については、勤務の日数や時間に応じて評価するなど必要な配慮を行う。

【注釈】

- 注1 部局の分野特性に応じて、適宜、業績評価領域（例えば、教育研究支援など）を追加することも可能である。
- 注2 部局の分野特性に応じて、4領域（追加領域がある場合は、それを含む）に係る評価対象期間については、当該年度含む複数年度を設定することができる。
[例えば、「研究」は、3年間（平成18～20年度）/評価実施：平成20年度]
- 注3 各部局が策定する評価基準とは、明文化されたものであり、かつ、全構成員に周知されているものをいう。
「申し合わせ」、「方針」、「実施要領」等の名称にはこだわらない。

評価作業 主要事項 日程表

評価関係主要作業 日程予定表（平成21年2月～平成22年3月）

事項	担当	平成20年度					平成21年度										
		2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
平成20年度 業務実績報告書 【国立大学法人 評価委員会】	各室等 各部局		達成状況シートの 作成・提出 部局照会 事項依頼 ←……………→	実績報告書作成班において 報告書作成		6月30日 文部科学省へ提出 学内諸会議 附議				平成20年度 評価結果 公表							
機関別認証評価 【(独)大学評価・ 学位授与機構】	評価室 教育・情報室 各学部・研究科等			第1次案を 教育・情報室にて 点検	第2次案	各学部・研究科 等に第3次調査 依頼(H20年度 未確定数や H21.5.1現在数 等)……………→	第3次案 学内諸会議 附議	6月30日 機構へ提出 機構において 書面調査	機構から 事前確認 事項等の 送付 ↓ 訪問 調査日の 1週間前 に回答	機構による訪問調査 (9～12月の2日間) ・大学関係者(責任者＝役員、 各研究科長等)との面談 ・一般教員、教育支援スタッフ (事務職員、技術職員等)との面談 ・教育現場の観察及び学習環境 の状況調査(観察) ・在学生、卒業(修了)生との面談 等						評価結果 (案)送付 ↓ 意見申立 機会付与	評価結果 公表

財務室

平成20年度教育研究等重点推進経費（追加公募）の執行計画

「教育研究等重点推進経費」の第2次執行計画案が12月22日の役員会で承認されました。本件は学内に追加公募を行い、申請のあった事業に対して、書類審査、ヒアリング審査により選定された執行計画となっています。採択事業の詳細は以下のとおりです。

部 局 名 等	事 項 名
附属図書館	電子ジャーナルバックファイルの購入
附属図書館	Web of Science バックファイルの購入
歯学研究科	学生実習用顕微鏡の更新
工学研究科	大阪大学全学共有 e-learning システムの構築
工学研究科	吹田団地1地区福利厚生棟周辺の交通を中心とした環境整備
外国語学部	講義室防音等改修工事に伴う附帯設備整備経費
産業科学研究所	CNC 旋盤
超高压電子顕微鏡センター	学内共同利用の汎用電子顕微鏡（日立・H800型）のテレビカメラの更新
総合学術博物館	待兼山修学館安全機能改善工事
大学教育実践センター	共通教育学生実験における設備更新
大学教育実践センター	文系総合研究棟 講義棟301他（全4室）映像配信システム 一式
保健センター	健康診断システム改修（特定健診対応）
コミュニケーションデザイン・センター	中之島コミュニケーションカフェの実施
日本語日本文化教育センター	国費学部留学生予備教育の改善のための調査事業
免疫学フロンティア研究センター	免疫イメージング技術開発における生体内の免疫反応可視化のための設備
医学部附属病院	生命維持管理・輸液装置（更新）
歯学部附属病院	生化学自動分析装置
歯学部附属病院	自動血球測定装置
安全衛生管理部	AED（自動体外式除細動器）整備経費
安全衛生管理部	不要薬品一括処分委託経費
施設部	箕面団地キャンパスマスタープランの策定
施設部	現有図面の電子化
執行計画額	合計 255,406 千円

中長期予算の在り方検討ワーキングの検討状況

財務室の下に設置された中長期予算の在り方検討ワーキングでは、本学の中長期予算の財務構想について、平成20年4月より活発な議論を重ね、12月15日開催の財務室会議の承認を経て提言案をまとめました。本ワーキングでは、中長期のシミュレーションを行うことにより、次期中期目標・中期計画期間における収支予測をたて、本学の財務状況を詳細に分析いたしました。その結果、このまま何ら対策を講じなければ平成23年度から赤字に転換することが想定され、次期に向けて早急に予算配分の仕組みを見直す必要があることと、一方で、本学の発展のため、事業区分や予算配分事業の見直し等により、一層効果的な戦略的経費活用の仕組みを導入することを提言しています。

なお、本提言は12月22日開催の財務基盤整備本部会議において審議・承認され、平成21年1月21日開催の部局長懇談会で提言資料を配付し、概要説明を行いました。

今後、財務室では、次期中期目標・中期計画期間における運営費交付金の算定ルールの動向等を見ながら、本提言の方向性に沿って具体的な検討作業を進めていく予定です。

人事労務室

裁判員休暇制度（有給）の導入

裁判員制度が本年5月21日から実施されることに伴い、本学においても、新たに裁判員休暇制度を設けることとなりました。

本学の常勤教職員及び非常勤職員が、裁判員（または裁判員候補者）に選任され、裁判所へ出頭する場合には、特別休暇（有給）として取り扱うこととなります（平成21年5月21日施行）。

大阪大学の開講する授業科目の受講による職員研修の導入

総長からご提案をいただき、本学常勤職員の資質・能力の向上を図るため、大学が開講する授業科目の受講を可能とする研修制度を設けることとなりました（平成21年1月26日施行）。

（詳細は、54ページに掲載）

広報・社会学連携室

大阪大学広報指針の策定

大阪大学の広報活動については、平成18年3月に策定され公式ホームページにも公開されている「大阪大学における広報活動の取り組みについて」（<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/committee/pdf/kouhoukatudou.pdf>）がその方向性を示しています。

今年度、広報・社会学連携室における広報指針の策定については、そこで示されている方針に則り、その後の大学内外の動きを反映する形で議論を重ねてきました。

大阪大学のモットーである「地域に生き世界に伸びる」は、大学における諸活動の原点であり、広報活動においてもこの点を基本的な姿勢とすることに変化はなく、今回新たに策定されたグラウンドプランの中にも、大阪大学の取り組む教育・研究・社会貢献事業を広く社会にアピールし、正確に発信することで大学の社会的説明責任を果たすことが求められています。

広報・社会学連携室では、大阪大学の果たす役割を十分に認識した情報発信の在り方を早急に検討し、各室、各部局等との連携を強化しながら広報活動を展開していきたいと考えています。

大阪大学公式ホームページをリニューアルします

大阪大学の様々な情報発信の即時性向上のため、情報の発生源から速やかにデータ更新できる新たなシステム機能を加えた、大学の公式ホームページ（日本語版、英語版）のリニューアルについて、4月からのリニューアルを目指し作業を進めています。

利用者の視点に立ち、国内外への最新情報の発信をより一層充実させたホームページになる予定です。

第4回ホームカミングデイの開催

平成21年5月2日（土）に第4回ホームカミングデイを開催します。

今年は、例年の式典に加え、各界でご活躍中の卒業生の方に、在学中の思い出なども交えてお話しいただく講演会を開催する予定です。また、卒業年度を決め、その年の卒業生に招待状をお送りし、母校に是非お越しいただく予定にもしております。（昭和56年3月に学部を卒業された方を対象にと現在検討を進めております）

当日は、各学部の同窓会もいくつか企画されています。詳細は、ホームページ等でお知らせする予定です。

国際交流室

上海交通大学における大阪大学留学フェア（Osaka U.-Days in SJTU）

昨年12月に上海交通大学（Shanghai Jiao Tong University）で標記の留学フェアが行われました。周知のとおり、同大学と大阪大学とは交互に学術交流セミナーを開催しており、昨年10月に第13回目が行われました。懇親会で同大学国際部の許萬国氏と歓談中に、「大阪大学単独の留学フェアを開催しましょうか、12月頃はどうですか」という話が出ました。早速、このことをレーザーエネルギー学研究センターの高部教授に伝えたところ、同教授の強力なリーダーシップにより、瞬く間に実現に至ったというものです。通常、大阪大学が単独で留学フェアを開催することはなく、各地で多くの大学が参加して開催される留学フェアに、本学から留学生センター・国際部学生交流推進課などが参加する場合があります。

しかし、今回は準備期間が2ヶ月弱であったにもかかわらず、理学部を中心とした37名もの教員が参加した大阪大学単独開催の大きなイベントとなり、その結果は大成功であったとの報告を受けています。30ページを超える詳細な報告書が高部教授により取りまとめられていますので、興味のある方には是非一度お読みください。

このイベントは、上海交通大学のような、いわゆる重点的交流推進校とも言うべき大学について、学生交流を推進するための効果的な方法の一つを提示したという意味で有意義であったといえます。座して待つのではなく、積極的に教員が出かけてゆき、本学の研究を外国の学生に直接披露し、多くの優秀な学生の目を本学に向けてもらうことが、今後の学生交流推進には極めて重要だからです。国際交流室としては、このように教員参加型の留学フェアの開催を今後積極的に企画するとともに、部局におけるこのような活動を応援したいと思っています。財務的支援はなかなか難しいですが、国際交流関連教職員との協働体制をつくり、今回のように本学の公式イベントと位置付けるようにしたいものです。もし、何か企画を考えている先生がおられましたら、国際企画推進本部まで是非ご連絡ください。

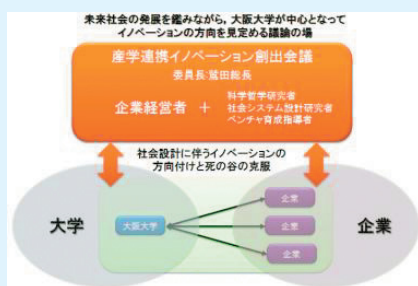
留学生30万人計画

昨年12月末の概算要求の内示では、本学からの要求に対しては残念ながらゼロ査定でした。しかし、文部科学省の「国際化拠点整備事業（グローバル30）」については平成21年度41億円が認められ、本年度は12拠点を選定することです。この事業は「英語による授業のみで学位取得ができるコースの設置、外国人教員の配置、留学生受入のためのワンストップサービスを行う拠点の整備等、国際化拠点としての総合的な体制整備を図る取組を支援するもの」とされ、本学も、年末・年始に関係者による予備的な会合を2度行い、応募への準備を開始しました。関係諸氏のご支援をよろしくお願いいたします。

ゆらぎ拠点第1回大阪大学産学連携イノベーション創出会議開催

11月5日(水)総長室にて、ゆらぎ拠点第1回大阪大学産学連携イノベーション創出会議が開催されました。当日は、委員長の鷲田清一総長をはじめ、河野芳明氏(株式会社村田製作所主席研究員)、西尾章治郎理事・副学長、柳田敏雄教授(生命機能研究科)、川合知二教授(産業科学研究所)、浅田 稔教授(工学研究科)が出席しました。

この会議の目的は、人類の未来においてどのようなイノベーションを本拠点で引き起こす必要があるか、そのイノベーションを創出するための大学や企業の役割は何かという、未来社会の設計と大学



大阪大学産学連携イノベーション創出会議の位置づけ

および企業の役割について語り合い、大阪大学を中心として今後起こりうるイノベーションの方向を見定めることです(図は、大学と企業の連携体制の中における「産学連携イノベーション創出会議」の位置づけを表すものです)。大学の運営、拠点に携わる者、企業の経営者、社会設計に関する有識者が意見を交換することで、研究と事業化の間にある「死の谷」を克服すると共に、真に望まれる未来社会の設計が可能になると考えています。

第1回会議では、従来の産業社会の論理と今後の展開、日本が世界をリードして高齢化社会に突入していくことへの対応など、多岐にわたる議題について幅広い視点から有益な意見交換が行われました。今後も、この会議での議論を通して、企業の方々とともに未来における大阪大学の役割を見据え、拠点運営やさらには大学運営に生かしていくことが期待されています。

(ゆらぎプロジェクト)

大学教育実践センター 第1回公開授業開催

大学教育のさらなる改革、そして教員中心の教育から学習者中心の教育への転換が求められる中、大学設置基準において「授業の内容及び方法の改善につながるような内容の伴った組織的な取組を行うこと」が規定されるなど、各大学には実効性を伴ったFDの実施が求められています。大学教育実践センターでは、このようなFD活動の一環として、今回初めて公開授業を実施しました。また、この公開授業は、英語部会の「科目別FD」活動の一環に位置づけられたものでもあります。

授業実施者は、共通教育賞特別賞受賞者の日野信行教授(言語文化研究科)で、11月7日(金)4限目にサイバーメディアセンターCALL2教室にて行われました。授業タイトルは「リアルタイムのニュースを通して国際英語の世界に参加する」でした。参加者は17名で、空いている席に座って受講生とともに実際に授業を体験する形で行われました。授業は、CALL教室の設備を利用し、授業当日の衛星放送テレビの英語ニュースとインターネット上の各国の英字新聞を併用し、英語での質疑を通じて、世界の出来事についてリアルタイムで考える形で進められました。当日は、中台公式対話とオバマ新大統領誕生のニュースが取り上げられ、立場の異なる複数のメディアを見比べ、報道の仕方に違いがあることも示されました。

公開授業終了後、「授業趣旨説明と質疑の会」が行われました。参加者は13名でした。最初に授業実施者より、この授業を「統合的国際英語教授法」と名付けていること、



母語話者の枠を超えた「国際英語」ユーザーの現実社会への参加を柱として様々な教育的概念の統合的な実践を目指していること等、授業趣旨の説明がありました。また、授業のポイントとして、当日のニュースを題材として複数のメディアを使用すること、ニュースの英語と学生の英語を教員が橋渡しすること等が示されるとともに、国際英語、NIE、CT(批判的思考)、グローバル教育の実践、CALL、統合的アプローチ、学習者の自律、正統的周辺参加など、授業を構成する教育的概念についての説明がなされました。

その後、質疑応答が行われ、授業の方法と考え方、著作権、成績評価、授業改善、自律的学習(学生の予習・復習など)について活発な質問があり、授業実施者の考えや経験・ノウハウなどの回答がなされました。

(大学教育実践センター)

第6回市民フォーラム開催

歯学研究科では、米田俊之研究科長の発案のもと、11月8日(土)に毎日新聞ビルオーバルホール(大阪市北区)において、「第6回市民フォーラム」を開催しました。



冒頭、脇坂 聡副研究科長の挨拶の後、同大学院教授ら5名が、今回の総合テーマ「進化した歯科治療」に基づき、最先端の歯科治療や歯科医療現場の現状を題材とした講演を行いました。

500名近くの参加者が講演を熱心に聴講し、講演後の総合討論では活発な質疑応答が行われ、最後に大嶋 隆歯学部附属病院長から閉会の挨拶がなされ盛況のうちに閉会しました。

参加者からは「各講演者から歯科治療の興味深い話が聞けて大変参考になった」との声や「是非継続してフォーラムを開催してほしい」との声など、数多くの意見が寄せられ、有意義な講演会となりました。

(歯学研究科・歯学部)

第1回革新的研究教育基盤機器開発整備事業ならびにリユース研究教育基盤機器整備報告会開催

科学教育機器リノベーションセンターでは、11月19日(水)に「第1回革新的研究教育基盤機器開発整備事業ならびにリユース研究教育基盤機器整備報告会」をコンベンションセンターにおいて開催しました。

革新的研究教育基盤機器開発整備事業は、学内公募で厳選された7件の開発プロジェクトを文部科学省に概算要求を行い、平成20年度から5年間の開発事業として認められ、市販品に比べて低コスト、高性能な阪大“only-one”の汎用機器開発を目指すものであり、当センターの先端機器開発室が支援を行っています。

一方、リユース研究教育基盤機器整備は、「大阪大学における設備整備に関するマスタープラン」に基づき、学内にあるリユース可能な研究教育機器を修理・復活再生させ、汎用性研究教育基盤機器として広く学内の教員や学生に共同利用させることを目的に、学内経費である教育研究等重点推進経費の要求を行い、平成19年度から順次実施しているもので、当センターのリユース促進室が担当しています。



報告会は、同センター運営委員会委員長の西尾章治郎理事・副学長による開会挨拶の後、笠井俊夫センター長の挨拶、中嶋英雄副センター長による開発事業説明が行われた後、各プロジェクト担当教員から機器開発の進捗状況及び開発計画について報告、紹介が行われました。

午後からは、大阪彩都総合研究所の松井 進代表取締役、糸川太司事業部長による「大阪大学科学教育機器リノベーションセンターに寄せる期待 - 地域中小企業の思い - 」と題した講演に続き、石塚 守副センター長からリユース整備の概要説明が行われた後、各局のリユース機器担当者によるリユース整備状況、共同利用状況等について報告が行われました。

当日は、教職員、学生を含め約80人の参加者があり、活発な質疑応答が行われたほか、

同センターの活動内容を広く理解していただく大変有意義な機会となりました。

(科学教育機器リノベーションセンター、研究推進部研究推進課)

第3回日越国際大学交流学生セミナー開催

基礎工学研究科では、11月10日(月)から11月15日(土)までベトナムのハノイ国家大学・ベトナム科学技術アカデミー連合大学院との共同で、第3回日越国際大学交流学生セミナーを開催しました。

ベトナムからは学生15人と教員7人、阪大側から学生38人が参加して、8つの講演、研究室訪問、工場見学、8つのグループに分かれての一泊合宿形式の討論、セミナー



のしめくりとしてのグループ討論及び最終報告会が行われました。最終日の修了式では戸部義人研究科長より修了証が授与されるとともに優秀なグループは表彰され、6日間にわたるセミナーは大成功に終わりました。

参加学生は英語で意見交換をしながら討論・発表を行い、日本人学生にとっては国際感覚を養う良い機会になりました。また、ベトナム人学生は研究室訪問により、基礎工学研究科とベトナム側との共同大学院DCサンドイッチ・MCジョイントプログラムへの興味を高める絶好の機会になりました。

なお、本セミナーの第1回は日本学生支援機構(JASSO)の支援を得て基礎工学研究科にてベトナムより15名の学生及び6名の教員を招聘して行い、第2回はベトナム・ハノイにて本研究科の学生22名と教員10名が渡越して行われました。第4回は平成21年11月にベトナム・ハノイにて開催予定です。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

マレーシア工科大学と部局間学術交流協定締結

11月20日(木)、マレーシア工科大学と基礎工学研究科・基礎工学部、太陽エネルギー化学研究センターとの間の部局間学術交流協定の締結式が、マレーシア工科大学(UTM)からSakurani教授(理学部長)、Sanagi教授(Ibnu Sina基礎科学研究所長)他2名をお迎えして行われました。本学からは、戸部義人基礎工学研究科長・基礎工学部長、大垣一成太陽エネルギー化学研究センター長、他関係者が出席いたしました。

同校は、1904年にクアラルンプールに設立されたTechnical Schoolに起源をもち、Technical Collegeを経て、1975年にマレーシア工科大学(UTM)と改称しました。このとき、メインキャンパスがジョホールバルに移され、現在、マレーシア最大の理工系大学として、約3万名の学生が、12km²以上もある広大なキャンパスで学んでいます。また、同校は、2009年からマレーシア政府によって研究重点大学として選定され(全国で3校)、これまで以上に、最先端分野の研究に重点を置いた研究活動を進めようとしています。

締結式の後、記念のシンポジウムが基礎工学研究科と太陽エネルギー化学研究センター教員の他、留学生を含めた大学院学生が多数参加して開催され、UTMと本学双方の



組織の紹介の他、9件の研究成果の講演が行われました。

UTMと基礎工学研究科・太陽エネルギー化学研究センターとは、2005年より、太陽エネルギー化学研究センター教員がUTMの客員教授として招かれる他、基礎工学研究科においてUTM卒業の学生を博士後期課程に受け入れることなどを通して、友好関係を築いてきました。協定締結により、今後、さらに学術交流が発展することが期待されます。

(基礎工学研究科・基礎工学部、太陽エネルギー化学研究センター)

バレーボール教室開催

大学教育実践センター・運動健康支援部門では、11月15日(土) 豊中地区第1体育館において、教職員および学生を対象として「バレーボール教室」(ゲスト講師：廣紀江学習院大学教授 [ロス五輪銅メダル、ユニバシヤード神戸大会優勝、ソウル五輪4位他])を開催しました。教職員・学生・近隣の高校生を含め80名が参加し、大変盛り上がった教室となりました。



オーバーハンドパスやアンダーハンドパスの初歩から、スパイク、ブロックに至る技術まで分かり易く丁寧な指導を受けることが出来ました。レベルは様々であったものの、楽しく且つ盛り上がった雰囲気の中で、真剣にバレーボールに取り組む参加者の姿がみられ、バレーボールを堪能した様子がうかがえました。

(大学教育実践センター)

最先端の物理を高校生に - Saturday Afternoon Physics2008 - 開催

高校生を対象に、第一線の研究者が最先端の物理を分かりやすく講義するとともに、実験やゲームも取り入れ、物理や科学に対する興味を引き出そうとするプロジェクト、「最先端の物理を高校生に - Saturday Afternoon Physics2008 -」が、大阪大学湯川記念室の主催、本学理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科、大学教育実践センター、核物理研究センター、レーザーエネルギー学研究センターの共催で、10月18日(土)から11月22日(土)までの6週にわたり、理学部大講義室(豊中キャンパス)で開催されました。

毎土曜日午後3時から6時までの授業は、(1)基幹講義：



自然界の様々な世界を訪ねる(2)コーヒーブレイク：実験デモ、実演、展示、交流、Q & A(3)実践講義：生きる物理、応用される物理、ゲーム、の3部で構成され、自然の謎を解き明かす最先端の物理を駆使して宇宙から極微の世界までを探索するとともに、我々の社会にこうした知識と技術がいかに生かされ実現されているかなど、未来への展望を含めてわかりやすく解説されました。

毎回、平均174人が参加し、講義終了後には内外から集まった講師たちに活発な質問を行うなど、「知りたい、学びたい」と思って自主的に参加した高校生の好奇心を満たすものとなりました。

また、工学研究科、レーザーエネルギー学研究センター、核物理研究センターにおける最新研究設備の見学も行われるなど、参加者にも好評のうちに全プログラムが終了し、最終日には、細谷 裕委員長から小泉潤二理事・副学長名の修了証書が授与されました。

詳細は本プログラムホームページ(<http://www.yukawa.phys.sci.osaka-u.ac.jp/SAP/>)に掲載されています。6週間にわたって大学が高校生に提供するこのプログラムは、本学湯川記念室が2005年から始めた日本初の試みですが、今回も盛況のうちに終了しました。

(湯川記念室)

第27回千石会総会開催

11月14日(金)コンベンションセンターにおいて、会員59名の出席のもと、第27回千石会総会が行われました。

「千石会」は、大阪大学に事務職員または技術職員として在職し、退職した者が、終生互いに交流し、親睦を重ねることを目的として、昭和57年5月に結成されたもので、正会員383名、本学の現職事務職員また



は技術職員である賛助会員99名の計482名により構成されています。

当日は、辻 仁会長と同会の顧問である月岡英人理事・事務局長の挨拶で始まり、議事に先立ち、叙勲受賞者の紹介及び物故者の報告と黙祷が行われました。

引き続き議事に入り、会員の異動報告、会計報告及び役員の交替について協議が行われた後、「大阪大学の近況報告」と題して、月岡理事・事務局長から本学の活動状況について報告があり、出席者は熱心に耳を傾けていました。

総会終了後、場所を医学部銀杏会館に移し、賛助会員を交えて懇親会が賑やかに行われ、次回総会での笑顔の再会を誓い、盛会裏に終了しました。

(総務部総務課)

薬用資源解析学(三栄源エフ・エフ・アイ)寄附講座最終報告会開催

薬学研究科主催の薬用資源解析学(三栄源エフ・エフ・アイ)寄附講座最終報告会が、11月25日(火)に医学部銀杏会館にて開催されました。

本寄附講座は、平成14年10月1日に三栄源エフ・エフ・アイ株式会社様のご厚意により開設され、「薬用植物由来の生物活性物質をシーズとする医薬リード化合物の創製」、「薬用植物由来の医薬シーズ化合物の探索」、「有用食用植物の育種」



の3テーマを主たる研究目標に掲げて、教育・研究が遂行されてきましたが、平成21年3月を持ちましてその6年半に渡る歴史に幕を下ろすこととなります。

今回、その締めくくりとして最終報告会が開催され、村上啓寿寄附講座教授からこれまでの研究成果の発表が行われました。続いて、三栄源エフ・エフ・アイ株式会社研究統括浅井以和夫様より同社におけるこれまでの天然食品素材の研究開発に纏わる講演があり、最後に同社相談役吉倉正博様から寄附講座の開設から現在に至るまでの運営・研究に対して総括のご挨拶を頂きました。

本報告会には143名の参加者があり、引き続き催された懇親会では、関係者一同で約6年間の歴史を振り返り、好評のうちに閉幕しました。

(薬学研究科・薬学部)

保健センターで講演会開催

11月27日(木)吹田保健センター2階会議室において、Imperial College London Health Centre のIrene Weinreb先生(Director of Clinical Services)による講演が瀧原圭子教授の司会のもとで実施されました。Weinreb先生にはImperial Collegeにおける保健センター活動について講演していただきましたが、守山敏樹センター長、太田妙子教授、西田 誠准教授、三上章良准教授、彦俊俊吾助教らが出席し、さらには看護スタッフをはじめとする多数の保健センタースタッフも参加し、熱心に聴講しました。Weinreb先生は、sabbaticalとして9月中旬より大阪大学に來られ、10月30日(木)に京都で開催された第46回全国大学保健管理研究集会において招請講演を行われました。

講演の後には、守山センター長から本学における保健センター活動の紹介もあり、それぞれの大学における保健センターの活動内容に関して情報交換を行い、これからの保健センターの役割についての構想とともに、大都市ロンドンと大阪の学生気質についても保健センタースタッフと活発な意見交換が行われ、大盛況のうちに終了しました。(保健センター)



英国領事が免疫学フロンティア研究センターを来訪

11月27日(木) 英国総領事館 (<http://ukinjapan.fco.gov.uk/ja/>) の領事(科学技術担当)のロバート・モリーニ氏が免疫学フロンティア研究センターを訪問されました。

モリーニ氏は、共通言語として英語が用いられ、英語版ウェブサイトも充実しているセンターに今後の連携の可能性を感じ、今回の訪問になったもので、西日本における科学技術事業を担当するモリーニ氏は京都、神戸、そして大阪の大学や研究機関を訪問し、英国の研究機関との連携をすすめています。

挨拶に続き、モリーニ氏と科学技術担当官の吉田祥子氏から英国総領事館の事業内容について説明がありました。続いて、審良静男拠点長からセンターの組織・研究内容などについて説明があり、英国からの研究者の受入について現状説明が行われました。

またモリーニ氏とセンターのスタッフの間で、外国人研究者が日本において研究活動を行う上での問題点について活発なディスカッションが行われ、研究者の家族も含めた生活のケアが特に大事であることを確認しました。



モリーニ氏は現在の免疫学研究は日本やアメリカが中心であるが、英国にも優れた研究機関があることを強調され、今後、英国総領事館とセンターの協力関係が発展し、両者と助成団体の協力によるイベントやセミナー開催等を通じ、日英間の研究交流が促進されることが期待されています。

(免疫学フロンティア研究センター)

第4回全学FDセミナー開催

11月28日(金)、教育・情報室と大学教育実践センターが主催する第4回全学FDセミナーが、約70名の参加者を集めて吹田・コンベンションセンターで開催されました。このセミナーは、各研究科で取り組まれているFD活動について情報交換をすると共に、全学的なFD活動を推進するために企画されました。

第一部では、小泉潤二理事・副学長の開会の挨拶に続いて、桜美林大学大学院教授でテレビのコメンテーターとしてもおなじみの諸星 裕先生が、「わが国の大学の致命的



諸星教授

な欠点」というテーマで基調講演されました。諸星先生は、我が国の大学の学部間にある壁の弊害、カリキュラム管理の欠陥、職員の専門性の欠如等、多岐にわたり舌鋒鋭く大学に存する問題点について指摘されました。

第二部では、各研究科からのFD活動が紹介されました。まず、瀬恒謙太郎工学研究科附属高度人材育成センター教授は、当該センターの活動内容の説明の後、合宿形式で行われる職員新任研修プログラム等について紹介されました。次に、人間科学研究科の川端 亮教授は、人間科学研究科において実施した模擬授業について詳細に報告されました。平田收正薬学研究科附属実践薬学教育研究センター教授は、薬学研究科における教育制度改革に向けたFD活動の現状と今後の展望について、さらに、坂東隆男大学教育実践センター准教授は公開授業をはじめとした健康・スポーツ教育科目におけるFD活動の取組について報告されました。各発表後には質疑応答の時間が設けられ、それぞれ活発な議論がなされました。

最後に、大学教育実践センターの工藤真由美センター長より、これら各研究科で行われているFDの様々な試みを全学で共有していきたいという挨拶がなされ閉会となりました。

(教育・情報室、大学教育実践センター)

サムライセミナー・2008開催

大学教育実践センター・運動健康支援部門では、11月22日(土)と29日(土)に、サムライセミナー・2008を開催しました。この催しは、過去5年間実施してきた武道教室の内容を、再構成したものです。

第1日目は、日本古来の剣術の練習方法である組太刀(くみたち)を体験しました。これは、木刀を持った2人が決められた形(かた)の動きを行うもので、中西派一刀流の技(わざ)をわかりやすくまとめた「東京高師五行之形」(とうきょうこうしごぎょうのかた)を教材としました。

第2日目は、模擬日本刀を使用し、居合(いあい)を練習しました。居合は、不意の攻撃にすみやかに対応する日本刀の使い方で、「全日本剣道連盟居合」を教材としました。

いずれも、激しい動きではありませんが、周囲への警戒、相手に対する観察、集中した気持ち、安定した身体などを必要とします。本セミナーは、これらの動きを実践することにより、自分の身を守る方法について考えることを目的



としています。

参加者の方々は、静かで落ち着いた雰囲気の中で、姿勢、呼吸に気をつけながら、真剣に動きを練習していました。

(大学教育実践センター)

留学生見学旅行実施

大学教育実践センター主催で、共通教育課程の留学生と彼らのチューターを対象とした見学旅行を平成20年度に2回実施しました。1回目は8月7日(木)、8日(金)の一泊旅行で鳴門の渦潮や阿波踊りなどを見学し、2回目は11月29日(土)の日帰り旅行で滋賀県内の忍術村と陶芸村を見学しました。参加人数はのべ68名で、様々な文化背景を持つ学生と教職員の交流が行われました。

今回の旅行では、実際に阿波踊りを踊る、あるいは粘土をこねてコップや花瓶を作る、といった体験型のイベント



が多く、留学生にとっては満足のいくイベントになったと感じています。また一泊旅行では夕食後にチューターの方に剣玉を披露してもらい、留学生も一緒に参加して大いに盛り上がりました。

留学生にとってこのようなイベントは日本文化に対する知見を深め、交流を促進させる場であることを強く実感すると同時に、来年度はさらに留学生の大学生活でのモチベーションを高めるような企画を実施したいと感じました。

(大学教育実践センター)

足もとの国際化連続セミナー開催

グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）は、10月25日（土）～11月29日（土）にかけて（毎週土曜日、計6回）北摂地域の市民を主な対象とした、足もとの国際化連続セミナー「多言語化する日本—関西の取り組みから」を開催しました。

この連続セミナーは、GLOCOLが推進する社会学連携事業の一つで、今回は、大阪大学が包括連携協定を結んでいる北摂5市（吹田市、豊中市、箕面市、茨木市と池田市）の全面的な協力を得て、外国人や多様な文化的背景を持つ



人々が増えていく日本において、この先、どのような課題が予想され、それに対して、様々な分野の人々がどのように協力して取り組んでいくかということについて、「多言語化」という視点から考える端緒とすることを目的に計画・実施されました。

セミナーでは、大阪大学の教員や北摂5市の当該分野の担当者の方、そして、関西において、医療、学校、コミュニティ放送局などの現場で、多言語化に関する活動に取り組んでおられる実務家の方々に講義を行っていただきました。いずれの講義も、多言語化の施策としての具体的な取り組みだけでなく、多言語の豊かさを積極的に評価する視点が盛り込まれている点が興味深く感じられました。また、参加者との間でも活発に意見交換が行われました。

GLOCOLでは、連続セミナーをはじめとする足もとの国際化に関する事業を平成21年度以降も、テーマも増やしながら展開していく見込みです。北摂5市の外国人内わけに占める留学生などの割合から見ても、足もとの国際化という問題は、大阪大学にとっても避けて通れない課題です。地域の市民の皆さんと、大学の関係各位の一層のご関心とご協力を得られるよう努力していきたいと思います。

（グローバルコラボレーションセンター）

第64回学術講演会～ネットワーク型先端学術科学を目指して～開催

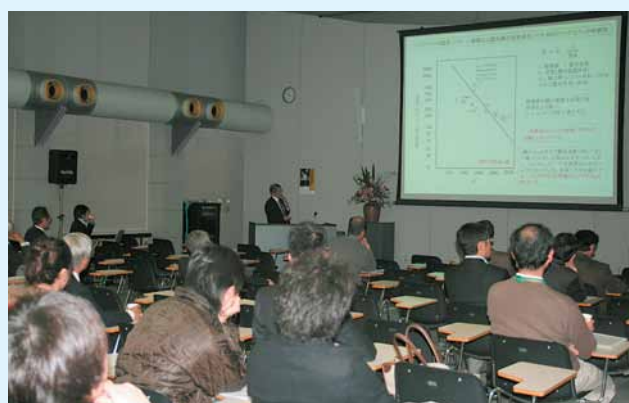
産業科学研究所では、12月1日（月）に接合科学研究所荒田記念館において「第64回学術講演会」が開催されました。

この講演会は、産業科学研究所の創立記念日の前後に開催される記念行事で本年度で64回目となり、午前中は各研究室、附属施設、共通施設による合計51件のポスターセッションが実施され、午後からは「ネットワーク型先端学術科学を目指して」をテーマとしたシンポジウムが開催されました。

シンポジウムは、山口明人所長の挨拶ではじまり、東北



特別講演中の東北大学 井上総長



シンポジウムの様子

大学の井上明久総長による「原子分子材料研究拠点課題としてバルク金属ガラスの魅力と将来性」と題する特別講演が行われ、学内の教職員、学生及び学外からの研究者等参加者約100名は熱心に聞き入っていました。続いて、本研究所教授等6名による一般講演にて個々の研究者が行っている最新の研究内容が紹介されました。本講演会は共同研究体制を点から線へさらに面へとネットワーク型研究に発展させる機会として、盛会のうちに終了しました。

（産業科学研究所）

高等司法研究科・法学研究科附属法政実務連携センター主催公開講義及び講演会開催

11月14日(金)、日刊工業新聞社さいたま総局長の尾崎真一郎氏を講師としてお迎えし、公開講義「わが国産業の将来—企業の見方、学生に望むこと—」を開催しました。

講義の中で尾崎先生は、まず、ここ20年・次に過去500年の中での日本・世界の重大な出来事を振り返り、現在われわれは時代の大きな転換点に立っていること、そしてこの急激な変動の中で生き残っていく企業を見極める視点として「魅せる企業」「価値を生み出す企業」といったキーワードを提示されました。記者として多くの企業の現場を見てこられた先生の言葉は大変迫力があるものでした。講義の随所に学生たちへのエールが込められており、「常に問題意識をもつこと、言葉の力を鍛えること」、そして「変化することのリスクを恐れるのではなく、自ら変化をつくり出す人間になるべきだ」とのメッセージは学生たちに強い印象を与えたようでした。



参加者からは、「変化に意識的に対応できるようアンテナを拡げていきたい」「自ら変化を生み出しうる人間を目指すと同時に変わらない価値も守れる人間になれるよう努力したい」といった感想が寄せられました。

11月20日(木)、総務省大臣官房企画課長の鈴木茂樹氏を講師としてお迎えし、公開講義「経済成長力の強化とICT政策」を開催しました。

講義の中で鈴木先生は、まず、成長率が鈍化している日本経済の厳しい現状、一人の働き手にかかる高齢者支援への負担増、若者達の政治離れの傾向など、日本社会が抱える諸問題について具体的なデータに基づいて大変わかりやすくご説明くださいました。その上で、日本経済復興の鍵として「ICT（情報通信技術）の強化」を示されました。GDP成長率に対するICT産業の寄与率はプラスであるが、世界市場における日本の地位はまだ低いこと、そこでICT産業のさらなる躍進のために、従来の「ICT基盤整備」を基本とした政策から「あらゆる産業・地域とICTとの深化した融合」を推進する新たな戦略の必要性を強調されました。

参加者からは、「新しく発展すべき分野において、日本



独自の強みを探していく必要があると感じた」「ICT産業の発展は今後の日本経済の生き残りの生命線であるということ強く認識した」「私たちの世代こそ、自分自身のことだけでなく、国全体の将来について真剣に考えていかなければならないことを痛感した」などの感想が寄せられました。

12月3日(水)、大阪国税局査察部長の飯島信幸氏を講師にお迎えして、税法講演会「税務行政の現状」を開催しました。講演では、パンフレットや統計を用いた豊富な資料をもとに、親しみやすい雰囲気の中、申告納税制度や査察制度の概要について説明いただいた後、e-Tax制度・コンビニ納税など、税務制度の新たな取り組みについても紹介いただきました。特に、飯島先生が勤務される「査察部」での臨場感ある体験談は、受講生に大変好評でした。受講生からの質問にも非常に丁寧にお答えいただき、受講生からは、「普段の生活では税について知る機会が今まであまりなかったが、今回の講演を聞いて、税について少し具体的にイメージできるようになり参考になった」「皆に納得される適切な租税行政が行われるためには、私たち国民一



人一人が税についてもっと関心と責任を持つ必要があると思った」といった感想が寄せられました。

(高等司法研究科、法学研究科・法学部)

第40回大阪大学中之島講座開催

平成20年10月～12月までの3ヶ月間に計15回に亘り、第40回大阪大学中之島講座が実施されました。

大阪大学中之島講座は、現代の科学・技術の急速な発展、政治・経済の激しい変化や生活様式の変容の中で、大学の研究成果を広く一般市民・学生の皆様に開放し、生活・職業上の必要な知識の普及と一般教養の向上に資するために企画されたもので、今年度で40回目を迎える伝統的な本学の公開講座です。

今年度の統一テーマは、「いまを生きるということ ～市民・社会と大学」と定め、「ひとと社会を考える」、「司法への参加を考える」及び「医療の仕組みを考える」という3つのサブテーマ（各5講座）を設定しました。



参加者は、いずれの方も意欲が高く、講義終了後の質疑応答では活発な質問が出されました。各サブテーマ終了後の参加者のアンケートでは、充実した内容だった、いずれの講義も分かりやすくすばらしい内容だった等の意見が、また、今後のテーマについては、「知」の最前線、教養的なもの、専門性の高いもの、歴史関係のもの等の希望が寄せられました。



（21世紀懐徳堂）

TA（ティーチングアシスタント）取材報告

中之島講座「安いで安全なお産はどうなる？～産科・周産期医療体制の問題～」を聴講して

（11月17日・中之島センターにて開催）

最近、妊婦のたらい回しなど産科医療の問題がマスコミなどで頻繁に取り上げられています。しかし、マスコミが主に話題にしているのは、産科医療の問題よりも、どちらかと言えば受け入れ拒否をした病院の問題であるように感じます。本当に大切なことは、現在の産科医療体制を改変していくことではないかと、私は思います。木村先生は産科医師の立場から現在の産科医療の問題やこれからどうすべきであるかをとても分かりやすく説明して下さいました。先生のお話の中で特に印象に残ったことは、“「安全」と「便利」は決して両立しない”ということです。私たちは、高度かつ最善の治療を安全にうけることができる「安全」と、いつでもどこでも思い立ったら近くで医療をうけることができる「便利」のどちらをも医療に求めています。どちらかと言えば、「安全」は当たり前に在るべきもので、「便利」になることをより求めているように思います。「便利 安全」の現在の日本の産科医療システムを、「安全」であることをより意識した「便利 安全」のシステムに変えていくことが重要であると解かりました。安心して女性が妊娠、出産できる体制をつくる為には、患者側の私たちの認識の改変も必要であると、この講義を聴いて感じました。

（報告者・浅野景子）

NSF-JSPSシンポジウム代表団が大阪大学を訪問

12月5日(金)にアメリカ国立科学財団(NSF)をはじめとするアメリカの大学、高等教育機関の代表団15名が大阪大学を来訪されました。代表団は12月1日(月)、2日(火)に早稲田大学で開催されたNSFと日本学術振興会(JSPS)主催のシンポジウム「大学の国際戦略——人・財の新たな潮流創出に向けて」の参加者で、シンポジウム終了後に日本の大学を訪問し、研究や教育の国際化の現状に係る視察を目的としていました。東京におけるシンポジウムは、5月に米国ワシントンで開催された日・米大学の国際化をテーマとしたNSF-JSPSシンポジウムの第2フェーズといえるもので、本学訪問はこの8ヶ月間にわたるプロジェクト



の締めくくりにあたります。代表団は大阪大学の先端研究の紹介と施設訪問、関係者との意見・情報交換会、一連のシンポジウムの総括等、盛りだくさんのスケジュールに参加されました。

午前中には、本学の国際交流室、国際交流委員等の関係者との意見交換会が開催されました。NSF東京事務所長のマチ・ディルワース博士によるNSFの活動、とくに研究と教育の融合についての講演につづき、大阪大学側からは西尾章治郎理事・副学長によって本学の国際化と世界トップレベルの先端研究に関するプレゼンテーションが行われました。

午後には、代表団一行が吹田キャンパス内の超高压電子顕微鏡センター、工学研究科ロボティクス研究室、レーザーエネルギー学研究センターを訪問し、最先端の設備や研究動向に関する説明を受けました。最後に訪問団は、一連のシンポジウムを総括するためのラップアップミーティングに参加し、大学の国際化に関するアメリカと日本の大学の問題について、日本の大学関係者と活発な意見交換を行い、笑顔で本学を後にされました。

(国際企画推進本部)

薬学研究科公開講座「くすりと医療」開催

平成20年度大学院薬学研究科公開講座が、11月29日(土)、12月6日(土)の2日間にわたって本学吹田キャンパス内コンベンションセンター1階研修室を会場として開催されました。

本講座は、薬学部6年制が導入され、薬剤師、薬学研究者の専門的かつ幅広い知識が益々必要とされている現在、生涯教育の一環として「くすりと医療」と題し、最新の知見をもとに薬学の現在の課題と将来への展望について、それぞれ最先端の分野で活躍する学内外の6名の講師により語っていただきました。薬剤師を中心に、幅広い年代層にわたる59名が受講しました。

開講に当たって、今回の公開講座の座長である平田收正教授の挨拶と開講についての趣旨説明があり、大阪大学総合学術博物館資料基礎研究系の高橋京子准教授、京都薬科大学の吉川雅之教授、神戸学院大学薬学部の徳山尚吾教授、大阪大学大学院医学系研究科の竹原徹郎准教授、大阪大学大学院薬学研究科の水口裕之教授及び近藤昌夫准教授により講義が行われました。各講義は、和漢薬の多様性、薬食同源、健康食品の有効利用と健康被害、遺伝子導入技術開発、C型肝炎に対する抗ウイルス治療、生体バリアを利用



した創薬研究など、医療薬学、医薬品と人との接点に関わるテーマで行われ、科学的基盤から医療に至る広範な内容をご紹介いただき、受講生は熱心に聞き入っていました。

また、最終日に行ったアンケート調査では、開催日程・場所などについて一部要望が寄せられましたが、内容的には極めて高く評価され、参加者から今後の本講座への強い期待が寄せられました。

(薬学研究科・薬学部)

平成20年度リーダーズ・アセンブリー開催

本年度のリーダーズ・アセンブリーが、12月6日(土)から一泊二日の日程で学生108名及び教職員14名の参加によりユニットピア篠山(篠山市)において開催されました。

本研修の目的は、体育系学内学生団体のリーダーである主将・主務等が一堂に会し、課外体育活動の意義及び諸問題を検討するとともに、講演及び講習等を通して、リーダーシップの向上及び課外活動の活性化を図り、加えてお互いの理解・親睦を深めることです。

1日目は東 明彦課外活動小委員会委員長の講話に引き続き、「Lead the Self」～一人称で自らのビジョンを語り、自ら実行せよ～をテーマにグループワークを行い、リーダーとして魅力的なプレゼンテーションを行うにはどうしたら良いかを、グループ内で実際にプレゼンテーションを行いながら学びました。

初日の懇親会には鷲田清一総長の出席を得て会場は大いに盛り上がりました。今年度は、全国七大学総合体育大会(七大大戦)2位、本大学が当番校で実施された阪名戦では



懇親会風景(学生と肩を組んで歌う鷲田総長と関学生部長)

総合優勝を勝ち取るなどのめざましい成果を挙げており、鷲田総長から今後も技を磨き、今年以上の成績を上げるとともに、大学生活を大いに謳歌して下さい、と言う力強い激励の言葉をいただき、本年度体育会六賞受賞クラブの発表と決意表明に加え、全てのクラブの代表者が壇上で今後の活動についての決意表明を行いました。締めくくりでは応援団からエールが送られた後、鷲田総長を中心に、学生、教職員が肩を組んで会場一杯の円陣を組み、大阪高等学校全寮歌を全員で合唱しました。懇親会で一気に親近感の高まった参加者達は引き続き各部屋に分かれて自由討議を行い、夜更けまで活発な議論を交わしていました。

2日目は安全管理の面から篠山市消防本部署員による「救命救急講習会」を実施し、心肺蘇生術やAED使用についての訓練を行った他、練習中に起きがちな骨折に対処するため、三角巾を使用した応急措置の講習が行われました。また、本学安全衛生管理部から山本 仁教授を招き、「大学における薬物汚染について」をテーマに、大麻についての誤った知識や危険性を周知するための講話を行っていただきました。さらに、柔道整復師の島津忠久氏から「効果的な練習プラン作成のためのポイント」を演題に、競技力向上に最短距離で結びつく練習プランを立てるために押さえておくべきポイントを解説していただきました。

分科会では参加者を9つのグループに分け、共通議題として「アルコールハラスメント」と「薬物使用について」、班別議題として事前アンケート等をもとに設定された8つの議題を取り上げ、活発な意見交換を行い、2日間の合宿研修が終了しました。

(学生部学生支援課)

人権問題に関する講演会開催

人権問題に関する講演会が、12月10日(水)に人間科学研究科本館第51講義室で開催されました。本学では、人権問題啓発行事の一環として、例年7月と12月に講演会を開催しており、12月は人権週間にあわせて開催したものです。

今回は、幅広い人権問題をテーマとして、講師に大阪府立大学人間社会学部の細見和之准教授を迎え、「歌に託された暴力の記憶」と題してご講演いただきました。

講演会では、音響機器を用いて実際に歌を聴くなど様々なアプローチでお話いただき、当日参加した約100名の教職員・学生は最後まで熱心に聴講し、人権問題に関する認識を深めました。また、講演終了後には活発な質疑応答が行われ大変有意義な講演会となりました。

(総務部総務課)



理学研究科外国人留学生懇親パーティー開催

平成 20 年度理学研究科外国人留学生懇親パーティーが、12 月 5 日(金)、豊中キャンパスの福利センターにおいて開催されました。

パーティーには、国際交流活動の盛んな豊中ロータリークラブの代表をお迎えし、外国人留学生、外国人研究者、指導教員、チューター学生及び国際交流に理解のある教職員・学生等 80 名が参加しました。WILSON AGERICO TAN ディニョ 留学生担当教員の司会のもと、東島 清研究科長の開会挨拶、豊島了雄豊中ロータリークラブ会長の挨拶



東島研究科長による開会挨拶



ベトナム人留学生による歌と演奏

挨拶に続き、金澤 浩副研究科長の発声による乾杯で始められました。留学生等の自己紹介、歓談の後、本年度は留学生等による母国音楽の演奏やゲーム等があり、大いに盛り上がり、懇親を深めることができました。また、留学生にとっては、日頃接することの少ない方々と懇談する良い機会となりました。

最後に、指導教員代表の野末泰夫教授の閉会の挨拶があり、名残惜しみつつ散会となりました。

(理学研究科・理学部)

基礎工学研究科留学生年末交流パーティー開催

平成 20 年度基礎工学研究科留学生年末交流パーティーを、12 月 11 日(木)、福利センター 4 階食堂(豊中地区)において、約 200 名の参加の下、盛大に開催しました。

パーティーは、熊谷悦生留学生担当教員の司会のもと、戸部義人研究科長・学部長、豊中ロータリークラブ澤木政光様、TIFA 代表葛西美紗様、アミーゴ代表薄波アキ様、尾方成信留学生相談室長から挨拶があり、岡村康行評議員の発声による乾杯で華やかに始まりました。本年も、留学生相談室の各種事業に貢献した留学生及び日本人学生に対

して、感謝状の贈呈が行われました。

また、アトラクションとして、日本舞踊やアルゼンチン音楽が演奏され、楽しい雰囲気の中お互いに懇親を深め、盛況のうちに閉会となりました。

なお、本パーティーは、日頃お世話になっている地域ボランティア団体・個人、家主、ホストファミリーに感謝するとともに、留学生、日本人学生、チューター学生及び教職員の親睦を深め、相互交流の輪を拡げることがを目的に、毎年基礎工学部留学生相談室を中心に催されているものです。



戸部研究科長の挨拶



感謝状贈呈

(基礎工学研究科・基礎工学部)

技術職員研修(第25回)実施

技術職員研修(第25回)が、12月11日(木)、12日(金)の両日にコンベンションセンターにおいて行われました。

この研修は、本学技術職員に対し、職務に関する必要な知識・技術等を広く修得させるとともに、自己啓発、相互啓発の機会を与えることにより、職員の資質の向上を図ることを目的として実施されたものであり、研修には、11



開講式

部局から36名の技術職員が受講しました。

開講式では、西田正吾理事・副学長から「阪大スタイル」(教育・研究・社会貢献)について説明があり、本学職員としてその社会的責任を一丸となって果たしていただきたい旨、激励の言葉がありました。その後、安全衛生管理部の山本 仁教授から「学生の安全教育に対する技術職員の役割」の講義、情報推進部情報基盤課の中島重雄専門職員及び木越信一郎主任から「情報セキュリティ基礎と大阪大学キャンパスネットワークのとりくみ」の講義、引き続き、技術職員講演及び発表が行われました。

2日目は技術職員発表及び報告の後、工学研究科の片倉啓雄准教授から「技術者を育てるための安全教育」の講義、引き続き行われた安全技術演習・フィッシュボーン演習では班別討議と各班による発表が行われました。

開講式では修了証書の授与が行われ、2日にわたる研修を修了しました。
(総務部人事課)

消防訓練実施

理学研究科では、11月19日(水)に豊中市北消防署の指導の下、総合的な消防訓練を実施しました。



研究科長、事務長も参加した粉末消火器による実践訓練風景

この訓練は、従来から、秋季全国火災予防運動に因って行っているものであり、又、例年、化学科3年次学部学生に対する化学実験の授業の一環としても実施しているものです。

今回は、実習室で火災が発生したことを想定した火災報知器発報による初期消火訓練・避難訓練、119番および防災本部への通報訓練、模擬火災による水消火器・粉末消火器・二酸化炭素消火器の実践訓練、煙発生器による煙体験、火災の初期対応に関するビデオ講習、消防署員による講話をそれぞれ行いました。訓練参加者は教職員・学生等約400名でした。

(理学研究科・理学部)

薬学研究科では秋季全国火災予防運動の一環として、12月12日(金)に学生・教職員約100名の参加を得て消防訓練を実施しました。

小林資正研究科長より「日頃から防火に努める心構え、初期消火の重要性」についてご自身の体験をふまえた講話があり、その後、消火器的使用方法について消火器販売業者より説明がありました。続いて、業者の指導のもと消火器を用いた模擬火災消火がおこなわれ、学生・教職員が積極的に参加しました。この訓練に使用された消火器は、薬学研究科に実際に設置されているものと同じABC粉末消火器であり、参加者には実際の火災を想定した臨場感のある訓練となりました。

恒例の消防訓練でしたが、初めて参加する学生・教職員も多く、参加者各自が初期消火の必要を認識するとともに防火への意識の向上が図れました。



(薬学研究科・薬学部)

拠点大学交流国際シンポジウム開催

産業科学研究所は、拠点大学交流国際シンポジウム（第21回 JSPS-KOSEF 日韓拠点大学交流（CUP）セミナー）を12月15日（月）、16日（火）の2日間、兵庫県淡路夢舞台国際会議場において開催しました。今回の国際シンポジウムは、1999年度から2008年度にわたり、独立行政法人日本学術振興会の支援を受けて行った、産業科学研究所、韓国漢陽大学校間の拠点大学交流事業「セラミックス材料科学・多機能型セラミックス複合材料の開発及び機能評価」を総括するものとして開催されたものです。

本シンポジウムでは、過去の事業参加者も含め、本事業へ参加する日韓の研究者だけでなく、関連する国内外の第一線の研究者の参加を得て、10年間の交流に基づく共同



研究成果の発表があり、高次機能を発現するナノ材料やナノデバイスに係る最近の研究成果等について、意見交換が行われました。また、本事業の後継事業として申請中のアジア研究教育拠点事業「太陽光を利用した物質・エネルギー変換システムの基盤構築」について、概要報告も行われました。



大山部長

15日のパンケットでは、漢陽大学校の金鍾亮総長、大阪大学の高杉英一理事・副学長等の挨拶に続き、独立行政法人日本学術振興会の大山真末国際事業部長の挨拶があり、参加者約70名は熱心に聞き入っていました。

16日には、シンポジウムの一環として、大阪大学と韓国漢陽大学校の大学間学術交流協定調印式が行われ、鷺田清一大阪大学総長と金漢陽大学校総長が出席し、それぞれの署名をもって協定が締結されました。

（産業科学研究所）

漢陽大学校（韓国）と大学間学術交流協定締結

12月16日（火）、兵庫県淡路夢舞台国際会議場において開催された拠点大学交流国際シンポジウムの一環として、大阪大学と韓国の漢陽大学校の大学間学術交流協定調印式が行われ、鷺田清一総長と金鍾亮漢陽大学校総長が出席し、それぞれの署名をもって協定が締結されました。



金総長（右）と鷺田総長

漢陽大学校は、1939年に設立された東亜工科学院を前身とし、その後、建国技術学院、漢陽工科大学を経て、1959年に漢陽大学校となりました。現在は、工科学部、建築学部を始め21の学部を有する韓国のトップ大学の1つです。

大阪大学産業科学研究所と漢陽大学校とは1999年度から2008年度にわたり、「JSPS（独立行政法人日本学術振興会）拠点大学交流事業」を行い、教員、研究者、学生の交流、若手研究者の育成、共同研究の実施、講義、講演、シンポジウムの実施等を通じ、多くの成果を挙げてきました。この事業の総括として、今回のシンポジウムを開催すると同時に、今後より広い分野における両大学の一層の交流を推進すべく、大学間学術交流協定を締結したものです。

調印式冒頭の挨拶で、鷺田総長は、本交流事業に対するJSPSとKOSEF（韓国科学財団）の10年にわたる支援に謝意を述べ、両校の交流を、シンポジウムの会場となった淡路島に架かる明石海峡大橋のように、長く力強いものにしていきたいと抱負を語られました。

（国際部国際交流課）

セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修実施

12月16日(火)、セクシュアル・ハラスメント防止等に関する研修がコンベンションセンター会議室において実施されました。この研修は、今年度において、新任の部局長、専攻長、学科長、事務(部)長、課長、補佐、技師長、看護師長及び新任の教授等の新たに監督者となった教職員及びセクシュアル・ハラスメント防止等に関する部局委員会委員等に対して、セクシュアル・ハラスメントの防止等に関し、その求められる役割等についての理解を目的としたもので、76名が参加して実施されました。

人権問題委員会委員長の北村 卓言語文化研究科教授が



山田特任教授



北村委員長

らの挨拶の後、弁護士であり本学人事労務室の特任教授である山田長伸先生から「キャンパス・セクシュアル・ハラスメントと刑事罰の可能性」と題する講演が行われました。

講演では、セクハラをめぐる議論の展開と法的規制、判例からみたセクハラ裁判の特徴と使用者としての大学の責任等について、判例の具体例などを紹介し分かりやすく説明され、管理職の果たすべき役割等として総括されました。

受講者は熱心にメモを取り、最後に質疑応答が行われ、好評のうちに終了しました。

(総務部人事課)

第9回年末ふれ愛コンサート開催

歯学部附属病院では、入院患者さんにやすらぎのひとときを過ごしてもらうため、第9回目の「年末ふれ愛コンサート」を去る12月19日(金)に開催しました。

今回は、例年の実施場所(歯病玄関ロビー)から歯学研究科F棟5階弓倉記念ホールに場所を移し開催されましたが、医師や看護師に付き添われた患者、家族、見学者が開催時間前よりつめかけ、前年と変わらず熱気に満ちたステージとなりました。ハンドベルやピアノ、バイオリン、独唱、サックスによるクリスマスソングからゲーム音楽、最近のヒット曲、クラシックまで幅広いジャンルの演奏や迫力のあるコミカルなダンス、また、手元を公開するテーブルマジックが医師によって繰り広げられ、どの出し物に対しても、患者の鳴りやまぬ拍手がありました。最後にピアノ伴奏にあわせて出演者や患者、見学者全員による「見上げてごらん夜の星を」の斉唱をおこない、患者、病院職員、見学者の一同が楽しい一夜を過ごしました。



後日患者さんのアンケートには「先生方、忙しい中楽しませてもらいありがとうございました」「とても楽しく、しんどい入院生活にほっとする時間でした」「先生方の意外な一面が見られて楽しかった」と感謝の声がありました。

(歯学部附属病院)

接合科学研究所東洋炭素「先進カーボンデザイン」共同研究部門創設記念シンポジウム開催

12月9日(火)、大阪大学荒田記念館において東洋炭素「先進カーボンデザイン」共同研究部門創設記念シンポジウムが開催されました。東洋炭素「先進カーボンデザイン」共同研究部門は平成20年10月1日に接合科学研究所に開設され、接合科学研究所が有する異種材料の接合やナノ粒子複合化技術および界面評価技術と、東洋炭素が有するカーボンの処理技術、デバイス化技術を融合して、先進カーボ



式典で挨拶をする野城所長

ン材料の設計・実用化を図るとともに、そのための人材をグローバルに育成することを目標としています。本シンポジウムは、共同研究部門開設を関係各位に披露するとともに、先進カーボンの可能性と実りある産学連携の促進について広く意見を伺うために開催されました。

シンポジウムは近藤純子東洋炭素社長、野城 清接合科学研究所長、西尾章治郎理事・副学長の挨拶にはじまり、学界及び産業界からの講演、若手研究者の技術講演というプログラムで進められました。講演には大阪大学の産学連携の取り組み、半導体産業の未来への展望、共同研究部門の今後の取り組み、及び東洋炭素の最新の開発技術の紹介が含まれており、今後の活動の方向性を示すとともに若手人材の活躍を奨励する盛りだくさんの内容でした。

小雨のちらつくあいにくの天候ではありましたが、100人を超える方々にご参加いただき、シンポジウム後に開催された懇親会でも活発な産学の交流が行われ、相乗効果が十分得られた有意義なシンポジウムとなりました。

(接合科学研究所)

「第2回 学生・教員懇談会」で共通教育を熱く語る！

12月19日(金)大学教育実践センターイ講堂にて「第2回 学生・教員懇談会」を開催しました。このイベントは、共通教育のより良い在り方を学生と教員が対話をしながら、共に考えていくために企画されました。工藤眞由美大学教育実践センター長挨拶の後、多忙な中時間を作り駆けつけていただきました小泉潤二理事・副学長にも丁寧なご挨拶をいただきました。学生、教員、計53名の参加があり、熱心なやりとりが行われ、この問題に対する学生、教員、そして執行部の関心の高さを物語っていると思います。

魅力的な共通教育の授業を展開している増井敏行先生(工学研究科)が「化学を楽しく教えるコツ、学ぶコツ」という表題で、石黒 暢先生(世界言語センター)が「遠くて近い北欧—外国を通して自分を見つめる—という題目で授業の取り組み方やその内容について報告を行われました。

続いて鷲田清一総長からのビデオメッセージが放映されました。ここでは、価値の遠近法を持つこと、つまり、物事の軽重の判断が適切になされていること、そのためには広い視点を内在化する必要があることなど、教養教育に対する総長の深い考えが紹介されました。

最後に、「ここを変えたい共通教育」というテーマで全員参加のグループワークが行われました。

その結果以下のような提案がなされました。

- 1) インターラクティブな場のデザインを！
- 2) 専門課程に進んでも共通教育をとりやすく！



- 3) 授業情報の充実を
 - 4) 履修時登録時、授業のお試し期間が欲しい！
 - 5) がんばる学生に正当な評価を！
 - 6) 実践センターの様々な企画に参画したい！
- 等の意見が提出されました。

学生・教員とも参加者は大変満足していたように感じました。3時間近くに及び熱い語らいは、さらに懇親会へと続き、50名以上が参加して最後まで盛り上がりました。懇親会の挨拶では工藤センター長が上の諸意見に対する現段階での対応法について述べました。特に、センターの様々な企画に参画したい人に対しチューデントスタッフ制度の構想があるなどの報告がなされました。今後、より多くの幅広い学生・教員・職員を巻き込みながら対話を継続し、より広がりのある取組にしていきたいと考えています。

(大学教育実践センター)

体育会が豊中キャンパス学内清掃実施

大阪大学体育会に所属する課外活動団体の学生（38団体・100名）が12月20日（土）の青空の下、豊中キャンパス全域に分かれて学内清掃を実施しました。

この学内清掃は、学生の環境問題に対する意識を高めることを目的として体育会が中心となって毎年実施していますが、学生自らがキャンパスの清掃を行うことで、大学に対する愛校精神も育まれ、課外活動への一層の意欲の醸成が期待されます。

（学生部学生支援課）



清掃参加者一同

浙江大学医学部学生・教職員が医学系研究科訪問

12月22日（月）大学間学術交流協定校である浙江大学（中国）の医学部から、学生及び教職員計21名が医学交流を目的に医学系研究科を訪問されました。

倉智嘉久教授（医学科国際交流委員会委員長）と馬場幸子医学科国際交流センター特任助教の他、医学部学生6名が交流会に出席し、互いに大学紹介のプレゼンテーションを行い、その後、医学系研究科眼科学教室、医学部附属病院の循環器内科病棟や未来医療センター、附属図書館生命科学分館の見学を行いました。

見学後の昼食会では、浙江大学医学部の汪蘇華副教授と倉智教授による挨拶及び記念品贈呈の後、学生・教員ともに意見・情報交換などの盛んな交流が行われました。

（医学系研究科・医学部）



生涯生活設計セミナー(退職準備セミナー)開催

12月24日(水)、文部科学省共済組合・大阪大学主催、大阪教育大学・和歌山大学・国立民族学博物館・和歌山工業高等専門学校・国立国際美術館共催による平成20年度「生涯生活設計セミナー」がコンベンションセンターで開催されました。

このセミナーは、定年退職を間近に控えた国立大学法人等の教職員並びにその配偶者を対象に行われたもので、教



職員の退職に当たっての心構えや退職後の生活設計に必要な知識を提供することにより将来への不安を解消し、今後の社会生活、家庭生活の基礎づくりに役立ててもらうことをねらいとして開催されたもので、今年度は93名の参加者があり、退職後の生活について関心の高さをうかがわれました。

当日、本学月岡英人理事・事務局長の開会挨拶の後、退職後の生活設計を見つめる観点から、以下のプログラムで進められ、充実した内容の講義が行われました。

- ・生涯生活設計づくりに向けて 退職後の健康プラン
(教職員生涯福祉財団セミナー推進員 木曾 長)
- ・共済年金・退職後の医療保険
(教職員生涯福祉財団セミナー推進員 橋 光夫)
- ・退職後の経済プラン 経済生活プランの作成
(教職員生涯福祉財団セミナー推進員 毛利益之)
- ・退職後の生きがいのプラン 生涯生活設計のまとめ
(教職員生涯福祉財団セミナー推進員 木曾 長)
(総務部人事課)

大阪大学21世紀懐徳堂講座開催

大阪大学は大阪市と包括連携協定を締結していますが、連携事業の一環として平成20年10月から12月にかけて「大阪大学21世紀懐徳堂講座」として、計7回に亘り公開講演を開催しました。

会場は、地下鉄淀屋橋駅近くに旧愛日小学校跡地に建設された複合商業施設「odona」内にある、大阪市計画調整局のまちづくり情報発信施設「アイ・スポット」で行われ、



適塾見学会

大阪のビジネスの中心地である「中之島・御堂筋周辺」でオフィスワーカーを含めた市民や学生を対象に仕事や生活に直結した話題を提供する場として開催されたものです。

10月11日(土)は村田路人文文学研究科教授により、「『適塾』—解説と見学会—」という内容で行われ、アイ・ス



アイ・スポットでの模様

ポットで解説を行った後、適塾まで移動しました。その道中では村田教授により懐徳堂跡碑、除痘館跡碑、銅座跡碑(現愛珠幼稚園)の説明があり、適塾では塾内の模様や展示資料の他、普段目にすることのできない所蔵庫の貴重資料を間近で見ることができ、受講生は非常に興味深く聞き入っていました。

その他にも、以下のような非常に興味深いテーマが開講され、毎回多くの方の参加がありました。

- ・11月5日(水)「ナノサイズの炭素材料が秘めたサイエンス」
(講師：白石誠司基礎工学研究科准教授)
- ・11月11日(火)「サステナビリティへ向けた都市デザイン：国際的動向とベルーの事例」(講師：Helmut Yabar サステナビリティ・サイエンス機構特任助教)
- ・11月21日(金)「漢方治療のABC—女性特有の病気を中心に—」
(講師：有光潤介医学系研究科助教)
- ・12月1日(月)「どうなる!? 地方財政の行方」
(講師：齋藤慎経済学研究科教授)
- ・12月8日(月)「懐徳堂の歴史—逸話や未公開資料を用いて—」
(講師：池田光子文学研究科助教)
- ・12月16日(火)「いのち・ひと・夢 - 大阪の歴史から未来へ」
(講師：武田 裕中之島センター長)

なお、平成21年度の「大阪大学21世紀懐徳堂講座」は、春季(4月～6月)及び秋季(9月～11月)の2回を予定しています。春季の詳細については21世紀懐徳堂ホームページに公開していますので、ご覧いただき是非ご来場ください。

(21世紀懐徳堂)

「光のルネサンス2008」へ参加 - 阪大テーマ“夢見る光” -

毎年12月に大阪府中之島地区において、OSAKA 光のルネサンス実行委員会が実施している「光のルネサンス」に、本学も今年度から参加しました。

今年度は、大阪大学中之島センター隣が 中之島西部エリア のメイン会場となり、大変大勢の方々が来場されました。また、中之島地区の各所では様々なライトアップがなされ、冬のファンタジーが出現しました。

大阪大学中之島センターでは、12月18日(木)から25日(木)までの約一週間に亘り、10階のメイン会場側にLEDイルミネーションを、また、堂島川に面したガラス面にはサンタクロースや雪模様の動画を投影し、道行く人達を楽しませました。



中之島センターのイルミネーション



動画“サンタクロースの夢旅行”

本学のプロジェクトでは、21世紀懐徳堂運営委員会副委員長の金水 敏教授の呼び掛けにより、学内の学部生、大学院生有志約20名の「“夢見る光”実行委員会」が組織され、工夫を凝らしたアトラクティブなものとなりました。



また、1階のロビーでは、12月20日(土)と25日(木)の18時から、弦楽四重奏団“浪花きやろるず”(大阪大学室内合奏団有志)によるミニコンサート“あったか夢灯(ゆめあかり)コンサート”が行われました。クリスマスにちなんだ演目が奏でられ、多数の一般の方が聞き入っていました。



“あったか夢灯(ゆめあかり)コンサート”

(広報・社会学連携室)

年始の総長あいさつ及び賀詞交歓会開催

1月5日(月)にコンベンションセンター MO ホールにおいて、年始の総長あいさつが行われました。全教職員を対象に行われたのは今年が初めてであり、300名を超える多数の出席がありました。新たな一年を迎えるにあたり、教職員一人一人の意識の在り方について述べられた総長の言葉を受け、一同身を引き締めました。

また、引き続き場所を同センター会議室1に移して、教職員約140名の出席により、賀詞交歓会が開催されました。

はじめに鷲田清一総長から新年の挨拶が述べられた後、鷲田清一総長、辻 毅一郎理事・副学長、高杉英一理事・



副学長、門田守人理事・副学長及び武田佐知子理事・副学長による鏡開きが行われ、西田正吾理事・副学長の発声による乾杯で開会しました。出席者には樽酒がふるまわれ、新年の慶びをにぎやかに祝いました。また、今年からは各室室員にも出席いただいたことから、各理事による各室室員の紹介がありました。

出席者は、今年1年が充実した年であることを祈念するとともに、大阪大学のさらなる発展のために尽力していくことを誓い、盛会のうちに閉会しました。

(総務部総務課)

情報通信研究機構との脳情報通信分野における融合研究に関する基本協定締結

国立大学法人大阪大学(総長:鷲田清一)と独立行政法人情報通信研究機構(NICT)(理事長:宮原秀夫)は、脳情報通信分野における融合研究に関する基本協定を1月7日(水)に締結し、鷲田総長、宮原理事長の出席のもと、東京都内のNICT麹町会議室において調印式が行われました。

大阪大学とNICTは従来から、フォトニックネットワーク技術、バイオICT、ナノICT等に関する共同研究、連携大学院協定、研究員の受け入れなど多様な連携を実施し、数多くの成果を挙げてきており、今回の協定締結では、脳



協定書に署名後、握手する宮原理事長(左)と鷲田総長(右)

情報通信分野における基礎から応用展開までの研究開発を一体的かつ効果的に実施するため、産学官の他の機関との連携も強化しつつ融合研究プロジェクトを開始し、脳情報通信の研究開発の流れを一気に加速させ、「脳の機能に学んだ新世代のネットワーク」や「「こころ」を伝えることができる情報通信」の実現を目指します。

(研究推進部産学連携課)

在阪報道各社と大阪大学との新年懇談会開催

1月8日(木)に、本学の最新の教育・研究活動について情報発信するとともに、報道関係者との意見交換を目的とした「在阪報道各社との新年懇談会」が中之島センターで開催されました。

中之島センター9階の会議室において開催された懇談会には、本学からは鷲田清一総長をはじめ、各理事、幹事及び総長補佐等が、報道関係からは10機関から12名の出席がありました。鷲田総長の挨拶、大学関係者及び報道関係



者全員の自己紹介の後、「大阪大学グラウンドプラン」の策定について報告の後、報道各社との意見交換が行われました。

また、社会学連携プログラムとして実施されている「中之島コミュニケーションカフェ2008」の活動報告も行われました。

引き続き、交流サロンにおいて懇親会が催され、大学執行部との情報交換が活発に行われました。

(総務部評価・広報課広報・社会学連携事務局)

「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラム「総長ラウンド」開催

新年早々の1月10日(土)、文部科学省「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)」に採択された「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムの一環として、夏に実施した合宿研修後の活動報告を兼ねた発表会を「総長ラウンド」として開催しました。

会場の大学教育実践センターイ号館イ講堂には、合宿研修参加学生及び一般学生約60名が集い、午前中の第一部では、事前募集した「アクションプラン」や「企画しているプログラム」など7テーマに分かれてグループワークを行い、午後の第二部では、鷲田総長をお迎えして第一部で

のグループワークの内容を各グループが発表しました。参加学生は、鷲田総長との「刺激的な」対話により「阪大スタイル」をより深く考えることができ、視野が広がったと感激していました。

この総長ラウンドで討議した学生の自主的企画については、来年度のいちょう祭で実施する予定で、すでに準備がスタートしました。

学生支援GPの過去の活動状況や、行事予定については、本プログラムのウェブページ(http://www.osaka-u.ac.jp/jp/campus/leadership_GP/index.htm)をご覧ください。



総長ラウンドでのディスカッションの様子

(学生部キャリア支援課)

岸田 諭君が競技かるた名人位決定戦に出場

小倉百人一首かるた競技の日本一を決める「第55期名人位・第53期クイーン位決定戦」(全日本かるた協会主催)が、1月10日(土)に滋賀県大津市の近江神宮で開催され、大阪大学競技かるた会所属の岸田 諭君(医学部4年)が名人位に挑戦しました。

名人位戦は5回戦で行われ先に3勝した方が勝者となるもので、岸田君は、永世名人位を持ち今回史上初の11連覇を目指す現役名人と対戦し、幸先良く1回戦を4枚差の接戦で勝利しましたが、その後ペースを掴んだ名人に3連敗を喫し、1勝3敗で惜しくも名人位を逃しました。



対戦中の岸田君(左) 写真提供: 阪大POST



岸田君は名人位決定戦には今回が初出場でしたが、これまでも昨年の第57回高松宮賜杯近江神宮全国歌かるた大会のA級で優勝するなど数々の功績を残しています。また、岸田君の所属する大阪大学競技かるた会も、第87回及び第88回全国職域学生かるた大会のA級で連続優勝するなど目覚ましい活躍をしています。

1月21日(水)には、小泉潤二理事・副学長、大和谷 厚学生生活委員会委員長、関 昭裕学生部長及び鈴木 剛学生支援課長同席のもと鷲田清一総長への報告が行われ、鷲田総長から今回の功績を讃えとともに今後の活躍を願って激励の言葉が述べられました。

(学生部学生支援課)

『障害学生支援室カフェ』開催

障害学生支援室では、学生・教職員が身近に障害やバリアにまつわる事柄を考える機会として、『障害学生支援室カフェ』を開催しています。1月22日(木)には、総合博物



館とミュージアムカフェ「坂」において、“視界バリア”をテーマとした障害学生支援室カフェ『“見えない”バリアを探せ!』が行われました。参加者は、学生10名、教職員5名の計15名でした。

今回のカフェマスターは、大学から課外活動研究費を獲得し、博物館における視界バリアの調査を実施してきた“視界バリア調査チーム”(代表:堀井隆弥さん、経済学部4回生)が務めてくださいました。参加者は、車いす疑似体験者と介助者がペアとなって総合博物館を観覧し、車いす利用者の視界からは見えにくい箇所や見えない箇所を点検しました。その後、ミュージアムカフェ「坂」において飲み物を飲みながら、発見した視界バリアやその解消法について、活発な話し合いが行われました。

(学生部キャリア支援課)

第2回イノベーションフォーラム開催

文部科学省科学技術振興調整費「イノベーション創出若手研究人材養成プログラム：協働育成型イノベーション創出リーダー養成」が、本年度からスタートしました。本プログラムは、産業界及び社会との間にパイプラインを形成すべくイノベーションコミュニティを立ち上げ、博士人材が広く社会で活躍できるシステムの構築を進めることを目的としています。

本プログラムによる第2回イノベーションフォーラムが、1月23日(金)シティプラザ大阪(大阪市中央区)において、「先駆者たちは何を見たのか～熱狂が生まれる瞬間」をテーマに、325名の参加者を迎え開催されました。

本フォーラムでは、イノベーション企業の代名詞、IDEO ゼネラルマネージャーのトム・ケリー(Tom Kelley)氏、GUIやレーザープリンターを発明・開発したことで知られるパロアルト研究所副所長のジョン・ナイツ(John Knights)氏、技術革新のダイナミズム研究で国際的に活躍する(有)テクノ経済研究所代表取締役の弘岡正明氏の3氏により、イノベーションそのものの意味、イノベーションを引き起こすために必要な発想・環境、混迷する世界経済に対して日本の大学・社会は今何をすべきかについて講演が行われました。

(産学連携推進本部)



鷺田清一総長の主催者挨拶



岡谷重雄文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術戦略官の来賓挨拶

シンポジウム「低炭素社会を目指す環境まちづくり」開催

サステナビリティ・サイエンス研究機構(RISS)は1月15日(木)、大阪大学中之島センター10階の佐治敬三メモリアルホールで、シンポジウム「低炭素社会を目指す環境まちづくり」～まちづくり編～『低炭素社会を展望する環境都市づくり』を開催しました。

馬場章夫 RISS 機構長の開会挨拶に続き、基調講演では



早稲田大学名誉教授・元日本建築学会長の尾島俊雄先生から「低炭素社会と環境都市」について東日本と西日本のヒートアイランド現象の違い、ライフスタイルの転換、日本独自の文化を基礎とした都市のあり方等、様々な事例を交え価値観の転換が重要なことをお話し頂きました。

また、環境モデル都市に選定された横浜市と北九州市からは具体的なCO₂削減の取組みについて、市民と産業界が一体となったモデル例の説明がなされました。パネルディスカッションでは大阪市、堺市、大手町・丸の内・有楽町地区再開発計画推進協議会から、CO₂削減活動、新交通システムの導入、ビジネス街でのワークスタイルや環境対策活動といったまちづくりの事例紹介を頂き、工学研究科の教員からコメントがありました。参加者は140人にのぼり、最後には低炭素社会を目指す環境まちづくりに向けた宣言文(案)が発表され、非常に意義深い機会となりました。

(サステナビリティ・サイエンス研究機構)

ゑびす男選び

— 阪大坂での阪大生と地域住民のふれあい —

ゑびす男選び実行委員会

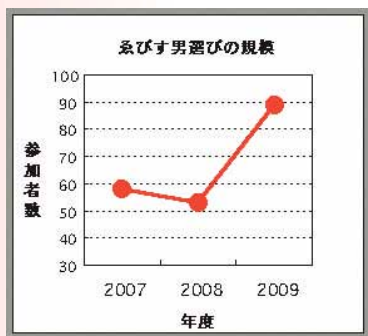
みなさん、年末・年始にかけて大学や商店街で右のようなポスターは見たことないでしょうか。

このポスターは「ゑびす男選び」という恒例行事のポスターです。「ゑびす男選び」とは、1月10日の本えびすの日に阪大坂を走って1番の福男を決めるというイベントです。3年前に始まり、参加者数はグラフのように急増しています。今年は、真冬の早朝にも関わらずなんと88名が健脚を競い阪大坂をかけあがりました。現在、とても盛り上がりを見せているイベントと言えます。

このイベントの目的はいったい何なのでしょう。そして何が参加者たちを走らせるのでしょうか。



イベントポスター



グラフ



坂を走る参加者の皆さん

このイベントは「阪大生と地域住民のふれあいを作りたい」と感じた商店街のベーカリー「タローパン」のオーナーの堤 洋一さんと経済学部の松村真宏研究室（以下松村ゼミ）の協力で始まりました。

松村ゼミでは2005年の秋ごろから商店街をフィールドにした研究を行っています。その研究の流れで2006年の暮れに堤さんからこの企画が出てきました。その話を受けて松村ゼミで一丸となって取り組んで2007年から始まりました。初回の成功があり2008年、2009年へとイベントはつながっていきました。

イベントの次の3場面を通して阪大生と地域住民のコミュニケーションは生まれます。

まず走る前の待ち時間を通して、これから走るライバルとなる阪大生・住民の方々との交流が生まれています。

また、走った後は参加者へ商店街から豚汁がもれなく振舞われます。「阪大坂を駆け上れた。」という達成感の共有することで、いつも通り過ぎがちな商店街の「おっちゃん」「お姉さん」たちと会話が弾むのではないかという思いで豚汁はふるまわれています。

さらに1、2、3位の福男（女）を表彰した後、抽選会も行われます。これをきっかけに石橋の町と商店街を知ってほしいとの思いから、景品はすべて各商店が取り扱っている商品や商品券です。石橋とはどんな町なのか・商店街にどんなお店があるのかを知るいい機会になっていてイベント後にも経験は繋がります。



豚汁を食べながら会話をする皆さん



表彰式の様子

イベントの大成功の背景には運営委員会の努力と地域の住民の暖かい手助けがありました。

「糸びす男選び@阪大坂も今年で三年目を迎え、阪大生、地域の方々の双方に地域の恒例行事として認識され始めているように思います。事実、運営を進める中で大学内では知名度の高さを実感し、地域では「今年も頑張ってるね」「毎年楽しみにしています」という温かい応援の声を頂くということがよくありました。そして何より、親子での参加や高齢者の見学が多数あったことに、この催しが大学という枠を越え、幅広い世代への繋がりを作り出しているのだということを感じました。私たちは、この糸びす男選び@阪大坂によって大学と地域が楽しい時間を共有することが、互いのよりよい交流に繋がることを願っています。」

（運営委員長 前川隆志）



糸びす男選び実行委員会

商店街と学生との交流をサポートすることで、地域住民と学生のコミュニケーションは活発になります。学生側にとっては毎日の通学がより楽しくなります。地域にとっても阪大生という新たな話し相手ができる——そんな可能性をこのイベントは秘めているのではないのでしょうか。来年の2010年1月10日も糸びすさんは阪大坂で待っています——。

（執筆者 糸びす男選び実行委員会運営委員 高木章宏）

好光武彦准教授「Asian Core Program Lectureship Award 2009」受賞

薬学研究科の好光健彦准教授が、中国杭州で行われた3rd International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia under Asian Core Program (ICCEOA-3)においてAsian Core Program Lectureship Award 2009を受賞しました。

International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (アジア最先端有機化学国際会議)は、アジアにおける世界的水準の有機化学研究交流と発展を目的として開催されております。ACP Lectureship Awardは、日本、中国、韓国、タイ、台湾、シンガポールの6ヶ国・地域より構成された総合評価委員が本会議において特に優れていると認めた研究成果に対して与えられる賞です。

好光准教授は、今回、“New free-radical-based method for the synthesis of bioactive molecules: direct transformation of $\text{sp}^3\text{C-H}$ bond adjacent to nitrogen or oxygen atom”と題する、フリーラジカル反応を駆使した生物活性物質の有機合成化学に関する発表を行い、その成果が高く評価されました。

10月22日(水)に授賞式が行われ、賞状を授与された他、2009年にはタイ国内の大学ならびに研究機関において講演を行います。

(薬学研究科・薬学部)



菊地和也教授「第22回日本IBM科学賞 化学分野」受賞

工学研究科生命先端工学専攻の菊地和也教授が、「生体内分子を可視化する化学プローブの設計と応用」による化学分野への貢献を評価され、第22回日本IBM科学賞 化学分野を受賞しました。受賞理由は、「これまでにない特異な可視化分子プローブを新たに開発するのみならず、それらを用いて生理活性に関する新しい発見をしてきていること。これらの研究は、プローブ合成と言う化学分野の成果にとどまらず、分子プローブ試薬として実用化されて生理学・生物学の研究にも用いられ、それらの発展にも大きく貢献し、基礎研究から学際的な応用分野にまで広がる展開をしたこと。」となっています。

この賞は、日本における科学分野の学術研究の振興と若手研究者の育成に寄与することを目的に、日本IBM株式会社によって1987年に創設された賞です。対象は、国内の大学ならびに公的研究機関に所属し、物理、化学、コンピューター・サイエンス、エレクトロニクスの4分野における基礎研究で優れた研究活動を行っている45歳以下の研究者です。

授賞式は11月26日(水)に都内にて行われました。



江崎玲於奈先生、白川英樹先生、野依良治先生ら歴代ノーベル賞受賞者を含む審査委員と共に(下段右から2人目が菊地教授。)

(工学研究科・工学部)

堂目卓生教授、奥中康人招へい研究員「第30回サントリー学芸賞」受賞

経済学研究科の堂目卓生教授が、『アダム・スミス - 「道徳感情論」と「国富論」の世界』（中央公論新社）の業績により、第30回サントリー学芸賞（政治・経済部門）を受賞しました。この賞は、広く社会と文化を考える、独創的で優れた研究、評論活動をした著者に対して毎年贈られるものです。

堂目教授の業績は、「世界経済の秩序理念を人間の社会的本性に裏打ちされたリアリズムを踏まえて再構築する営みへとつながる」という選評を受けました。また、堂目教授は、受賞の言葉として、「今後も、経済学の古典を誠実に研究しつつ、価値あるものを現代に届けたいと思います」と述べました。

（関連サイト：<http://www.suntory.co.jp/news/2008/10269.html>）

なお、贈呈式は12月9日（火）東京会館で行われました。

（経済学研究科・経済学部）



文学研究科の奥中康人招へい研究員が、第30回サントリー学芸賞（2008年度）を受賞しました（芸術・文学部門）。

この賞は、広く社会と文化を考える独創的で優れた研究、評論活動を、著作を通じて行った個人に対して、与えられるもので、選考にあたっては、個性豊かで将来の期待される新進の評論家、研究者であること、本人の思想、主張が明確な作品であることに主眼が置かれます。これまで日本を代表する研究者、評論家を数多く輩出しており、人文科学の分野では最も権威ある賞の一つです。

今回の受賞は著書『国家と音楽——伊澤修二がめざした日本近代』（春秋社）を対象としたものです。同書は日本における西洋音楽受容の基礎を築いたとされる伊澤修二を扱った評伝的研究ですが、ニュートラルな姿勢で、丹念な資料の発掘、読解を行ない、これまでの限界を打ち破る伊澤像を描いたことが、高く評価されました。

授賞式は、12月9日（火）東京・千代田区の東京会館において開催され、賞状および副賞が授与されました。

（文学研究科・文学部）



Quang-Hong Ngo君「IEEE Photonics Global Best Paper Award」受賞

基礎工学研究科システム創成専攻電子光科学領域博士前期課程2年のQuang-Hong Ngo君が、国際会議 2008 IEEE Photonics Global @ Singaporeにおいて、Best Paper Awardを受賞しました。

この賞は、本国際会議において最も優れた論文発表を行った学生に対して授与されるものです。授賞式は12月11日(木)、本国際会議のレセプションにて行われました。

受賞対象となった研究論文は「Detection of microwave signal by periodically-poled LiTaO₃ microwave rectangular waveguide using difference frequency generation」です。この論文は、非線形光学結晶を用いた新しい方形導波管構造デバイスの提案・動作実証実験に関する報告です。この論文で提案するデバイスは、非線形光学結晶導波管と分極反転技術を巧みに利用して差周波発生を行うことにより、高速光信号の検出やマイクロ波・ミリ波・サブミリ波の発生を行う新デバイスです。将来の超高速光通信システムにおける高性能光信号検出器や新しいミリ波・サブミリ波信号発生器としての応用が期待できるので、着想の新規性・今後の発展性が高く評価されました。

(基礎工学研究科・基礎工学部)



日本学生支援機構優秀学生顕彰事業表彰式実施

1月21日(水)に日本学生支援機構平成20年度「優秀学生顕彰事業」の表彰式が総長室において実施されました。

この優秀学生顕彰事業は、学術、文化芸術、スポーツ活動、社会貢献活動の4分野において優れた業績を挙げた学生を顕彰し、これら活動の一層の促進を奨励・援助し、もって21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的として日本学生支援機構により平成17年度に創設されたものです。

本学からは、スポーツ活動分野で人間科学部3年生の松浦由加子さんが奨励賞を受賞されました。松浦さんの受賞は、第49回全日本ターゲットアーチェリー選手権大会リカーブ部門女子準優勝、第62回国民体育大会アーチェリー競技成年女子団体6位の業績が評価されたものです。

当日は、小泉潤二理事・副学長、三浦利章人間科学部長、大和谷 厚学生生活委員会委員長及び関 昭裕学生部長の列席のもと驚田清一総長から表彰状が授与されました。引き続きお祝いの言葉として、受賞者が学業以外においても活動の場を広げ、輝かしい成績を修められたことをたたえ、今後も一層の精進を祈念するなどが述べられ、終始なごやかな雰囲気の中に閉会となりました。

(学生部学生支援課)



米井力也教授(文学研究科)逝去



文学研究科教授米井力也先生は病氣療養中のところ、10月26日(日)喉頭部リンパ腫にて逝去されました。享年53歳でした。

先生は1955年のお生まれで、京都大学文学部をご卒業後、同大学大学院文学研究科博士課程(国文学専攻)に進まれ、同博士後期課程を単位取得退学ののち、京都大学研修員、金蘭短期大学講師、同助教授、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科文化動態論専攻文学環境論講座教授に就任されました。

先生は、予期しない発病とその後の療養生活という困難の中で、外国語学部日本語専攻での教育に携わりつつも、文学研究科の新専攻の院生への教育と研究指導にはまったく手を抜くことをせず熱心に取り組まれ、「文学環境論」という新しい研究分野の発展のために意欲的に活動を行っ

ておられました。留学生を含む院生たちは先生のそうした情熱に深い感銘を受けていました。先生の新研究分野に期待する情熱の一端は、2008年7月末にお元気で参加された座談会についての記録、「座談会：横断する文学としての文学環境論——その可能性をめぐって」(『待兼山論叢』第42号(文化動態論篇)、2008年12月)からも十分に感じ取れるものです。

先生のご研究は、主著『キリシタンの文学』(平凡社、1998)や論文「異界の変奏—大航海時代の異言語接触」『文学』(岩波書店、2001)などの多数の業績からうかがえるように、キリシタン文学における翻訳の問題についてです。16・17世紀に日本にやってきた多くの宣教師は、ラテン語、ポルトガル語、スペイン語の書物を日本語に翻訳したため、これらの外国語と日本語との間に軋轢が生じ、この軋轢の孕む諸問題を、先生は長く研究の対象とされました。先生はこのテーマを「異言語接触文学論」と呼んでおられましたが、さらにこの関心の的を日本のアニメや映画における「字幕」や「吹き替え」にて発生する異言語接触の問題に移され、「映像翻訳論」という新テーマに挑戦されました。

先生のご研究は、日本の学術界においてはきわめて個人的で近年ますます重要になりつつある分野でのご研究であっただけに、先生の若くしての急逝はまことに惜しまれます。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(文学研究科・文学部)

宮地 徹名誉教授(医学部)逝去



本学名誉教授宮地 徹先生は11月2日(日)逝去されました。享年96歳でした。

先生は、昭和14年に大阪帝国大学医学部をご卒業され、同年に大阪帝国大学副手になられた後、講師、助教授を経て、昭和29年に大阪大学医学部教授に昇任されました。

昭和41年からは附属図書館長も務められ、大阪大学の発展にご尽力なさいました。

先生は、病理学をご専門とされ、癌化学療法の開発や、アゾ色素の肝癌に対する影響の研究をお進めになられました。さらに、肝硬変と肝癌の関連についても、実験病理学的研究、人体病理学的研究を広汎に展開され、多大な業績をあげられました。他にも、肺癌の組織学的分類に関して、重要な貢献をされました。また、全国における病理解剖症例をとりまとめることにもご尽力され、現在まで続いている日本病理学会編集の剖検輯報の刊行に中心的な役割を果たされました。剖検輯報は本邦の疾病構造を知る上での貴重な資料として、病理学のみならず臨床医学においても大きな意義を有するものであります。

これらのご業績に対し、昭和52年には紫綬褒章、平成12年には勲三等旭日中綬章が授与されています。ここに謹んで宮地徹先生のご冥福をお祈り申し上げます。

(医学系研究科・医学部)

藤田廣志名誉教授(工学部)逝去



本学名誉教授藤田廣志先生は、11月17日(月)にご逝去されました。享年82歳でした。

先生は昭和27年大阪大学工学部を卒業後、昭和30年同大学院を修了、昭和31年同産業科学研究所に勤務され昭和38年には助教授に昇任されました。昭和38年から4年間科学技術庁金属材料技術研究所に出向された後、昭和42年大阪大学工学部教授に就任され、冶金学科機械冶金

学講座を担当されました。昭和49年からは、自らがその設立に深く関与された超高压電子顕微鏡センターの副センター長、昭和58年からは同センター長を併任され、平成2年に大阪大学を定年退官されました。

この間、先生は一貫して電子顕微鏡による材料物性の研究に従事され、卓越した業績をあげられました。特に、加速電圧50万ボルト(昭和40年・金属材料技術研究所)および300万ボルト(昭和45年・大阪大学)の2台の超高压電子顕微鏡の開発とその材料科学への応用は先生が心血を注がれたお仕事であり、超高压電子顕微鏡その場観察法という一つの画期的な材料解析の手法を確立した仕事として国内外からきわめて高い評価を受けられました。これらのご業績により、先生は、平成5年には紫綬褒章を受章、平成6年には日本学士院賞を受賞されました。また、平成14年からは日本学士院会員をお務めになっておられました。

常にパイオニアたることを標榜して研究に全身全霊をそそいでこられた藤田廣志先生のお姿を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

(工学研究科・工学部)

伊藤利根太郎名誉教授(微生物病研究所)逝去



本学名誉教授伊藤利根太郎先生は、12月21日(日)にご逝去されました。享年83歳でした。

先生は、昭和23年9月大阪帝国大学医学部を卒業後、昭和28年5月国立療養所星塚敬愛園厚生技官、昭和31年4月大阪大学医学部助手、同年10月同大学微生物病研究所助手、昭和34年8月同研究所助教授を経て、昭和46年1月同研究所教授に昇任されました。また、昭和58年4月から同60年9月まで評議員、昭和60年4月から同62年3月までは大阪大学附属図書館中之島分館長に就任するなど、大学行政の枢機に参画するとともに大阪大学の発展に尽力されました。昭和63年3月大阪大学を停年により退官され、同年4月大阪大学名誉教授の称号を授与されました。大阪大学退官後は昭和63年6月から平成5年9月までタイ王国

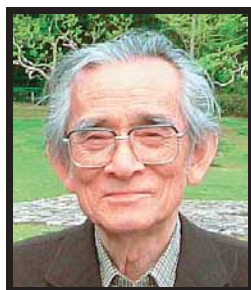
公衆衛生省伝染病対策局顧問として国際協力に貢献されました。また、平成6年3月財団法人阪大微生物病研究会理事に就任するとともに、同月同財団観音寺研究所長にも就任されました。その後、平成11年6月同財団理事を辞任されましたが、同月から平成17年6月まで同財団監事として就任されました。

先生のハンセン病医学上の研究は多岐にわたっており、らい菌及び鼠らい菌の生化学、らい菌・鼠らい菌の培養に関する研究、らい菌の動物移植、ハンセン病の化学療法、ハンセン病の免疫学などの基礎医学的なものに加え、臨床的研究も実施されておりました。生化学に関する研究は、未だらい菌の培養の成功と直接的な結びつきは見られていませんが、らい菌の代謝及び生物学的性状の多くが明らかにされました。ハンセン病の治療に化学療法が導入されて、完全治癒が可能となっただけでなく、全世界的なハンセン病の征圧が実現しつつある現在においても、らい菌の培養問題はなお未解決であります。その間、先生達によってなされたヌ・ドマウスによる実験らい(らい菌の動物移植の研究)の確立は、画期的な業績として認められました。これらの業績により昭和52年日本らい学会櫻根賞、タイ王国から四等タイ王冠勲章(1989年)及び四等白象勲章(1993年)を授賞されております。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(微生物病研究所)

伊藤順吉名誉教授(基礎工学部)逝去



本年名誉教授伊藤順吉先生は、1月9日(金) 急性心筋梗塞のためご逝去されました。享年94歳でした。

先生は、昭和11年に大阪帝国大学理学部物理学科卒業、同年理学部助手、昭和14年同講師嘱託を経て、昭和15年に同助教授、昭和20年に同教授、昭和21年音響科学研究所勤務、昭和26年産業科学研究所勤務、昭和33年理学部勤務を経て、昭和38年に基礎工学部に転ぜられ、昭和44年には、同学部長事務取扱として学部の管理運営に尽力され、昭和52年にて停年退職されました。

研究においては、理学部菊池研究室のメンバーとして、ベータ線のエネルギースペクトルの低エネルギー側における精密測定を進められ、ベータ崩壊理論の重要な決め手となる画期的な研究を行われました。また、原子核物理学研究以外にも、電子質量の相対論的補正を考慮した加速器装置などを考案されました。先生はその広範な学識と経験とをもって、戦後急速に発展しつつあった核磁気共鳴法(NMR)の物性研究における有効性に着目され、この方面の我が国

におけるパイオニアとして、研究に着手され、独創的な理論的見識に基づく優れた業績を挙げられました。世界初の含水化合物4プロトン系の共鳴線の観測に成功されました。またアンモニウムハライドの相転移に起因する核四重極分裂の観測は、共鳴線に関する四重極相互作用効果の重要性を認識させたもので、学会でも高く評価されました。さらにスピンエコー法を用いた遷移金属磁性合金の研究では、電子状態の理論的研究の発展に大きく貢献されました。特に希土類金属、合金に関する超高周波(数千メガヘルツ)域でのNMR研究は、他の追従を許さないまったくの先駆的なものでした。現在、学会や産業界の第一線で活躍されている門下生の数は極めて多く、その研究業績は多方面に渡っています。

学外においては、昭和27年日本学術会議原子核特別委員会委員、昭和30年には東京大学原子核研究所設立準備委員会専門委員として同研究所設立に参画され、また昭和37年には同大学物性研究所の協議会委員として、昭和40年、43年、44年、47年は同研究所の併任教授として、その発展、運営に尽力されました。昭和42年および昭和45年の2回にわたり、日本物理学会会長として学会の発展に尽力され、昭和47年には日本学術会議会員に推され、学術の振興にも貢献されました。

以上のように、伊藤順吉先生は、物理学の幅広い領域において優れた業績を挙げられるとともに、教育および研究指導にも優れた手腕を発揮されて、国内外の学術の発展に多大の貢献をされました。これらのご功績に対して、昭和52年に紫綬褒章が授与されています。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

(基礎工学研究科・基礎工学部)

記念講義

平成21年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
医学系研究科 （内科系臨床医学専攻放射線 統合医学講座）	中 村 仁 信	3月19日（木）16:30～18:00 医学部講義棟A講堂	血管造影・IVR から被曝防護まで
医学系研究科 （外科系臨床医学専攻生体統御 医学講座）	杉 本 壽	3月10日（火）15:00～16:30 医学部講義棟A講堂	新しいパラダイムから見た救急医療 と救急医学
産業科学研究所 （量子ビーム科学研究部門）	田 川 精 一	3月16日（月）15:00～ 接合科学研究所荒田記念館 大会議室	放射線化学から量子ビーム科学へ

平成21年度大阪大学入学式

平成21年度入学式を下記のとおり挙行政します。

日 時：平成21年4月1日（水）13時20分～14時10分 必ず13時までに入場し、着席願います。

学部と大学院の入学式を同時に挙行政いたします。

閉式後は、学部入学生を対象としたオリエンテーションを行います。

会 場：大阪市中央体育館 地下鉄中央線「朝潮橋」駅下車 2号A出口より徒歩5分

ホームページアドレス http://www.yahataya-park.jp/osaka_arena/index.html

ご来場の際は公共交通機関をご利用願います。

会場周辺での車の乗降は、交通渋滞等トラブルの原因となるおそれがございますので、ご遠慮願います。

学部入学生の方は、「合格通知書」を、大学院入学生の方は、「合格通知書」または「平成21年度大阪大学入学式のご案内」（各研究科より別途配付）をご持参願います。

同伴者の方は、入学手続時に配付いたします「同伴者入場整理券」をご持参でない場合は、入場をお断りする場合がございますので、ご了承願います。

【問い合わせ先】大阪大学総務部総務課総務係 TEL：06 - 6879 - 7014

国立大学法人等職員統一採用試験のお知らせ

近畿地区国立大学法人等職員統一採用試験の試験案内の配布が始まりました。

受 験 資 格：昭和55年4月2日以降に生まれた者

受 付 期 間：4月1日（水）～4月10日（金）

第一次試験日：5月17日（日）

詳しくは下記の事務室にお問い合わせください。

近畿地区国立大学法人等職員統一採用試験事務室

電 話：075 - 753 - 2227～2230

E-mail：shiken@mail.adm.kyoto-u.ac.jp

新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム(学生支援GP)
「Kaeru通信くりふ」創刊号発行

大阪大学では、平成19年度文部科学省の学生支援GPに採択された「市民社会におけるリーダーシップ養成支援」プログラムを学生部が運営主体となって実施しています。

このプログラムへの参加学生の交流を促進すると共に、プログラムでの活動を学内外の多くの方に知っていただくため、機関誌「Kaeru通信くりふ」を昨年12月に創刊しました。創刊号ではプログラム実施責任者の大和谷厚教授のメッセージ、学生支援GPの概要、昨年の8月から9月にかけて実施した合宿研修のレポート、学生部職員のコラム等を掲載しています。次号は、今年の1月10日に鷺田総長をお迎えし開催した「総長ラウンド」のレポート・鷺田総長からのコメント、学生支援GPの企画段階から携わっていただいております木川田一榮教授のメッセージ等を掲載する予定です。

本誌は下記の学生支援GPウェブページの「NewsLetter」からもダウンロードできます。(http://www.osaka-u.ac.jp/jp/campus/leadership_GP/index.htm)

(学生部キャリア支援課)



平成21年度懷徳堂古典講座“基本コース”

【中之島会場】大阪大学中之島センター(大阪市北区中之島4-3-53)

- A-1 古写本で読む源氏物語(講師:大阪大学大学院文学研究科准教授 加藤洋介)
- A-2 幸田露伴『芭蕉七部集評釈「猿蓑」』を読む
(放送大学大阪学習センター長・大阪大学名誉教授 柏木隆雄)
- A-3 世阿弥の能を読む(大阪大学大学院文学研究科教授 天野文雄)

【梅田会場】大阪市立総合生涯学習センター

(大阪市北区梅田1-2-2-500 大阪駅前第2ビル内)

- B-1 莊子を読む(愛知教育大学・皇學館大学名誉教授 野村茂夫)
- B-2 論語を読む(立命館大学教授・大阪大学名誉教授 加地伸行)
- C-1 中国の歴史故事を鑑賞する(大阪大学文学研究科教授 高橋文治)
- C-2 文人と書画漢詩文(元京都女子大学教授 大野修作)



各コースの開催日時、内容等につきましては、懷徳堂記念会事務局までお問い合わせ下さい。

(ホームページ等にも掲載しております)

集中コース・特別コースにつきましては、4月頃にお知らせする予定です。

受講料

全8回分 16,000円(一般) 10,000円(会員・別途年度会費3,000円必要)

受講料は半期単位での納入も可能

お申込方法

下記の懷徳堂記念会事務局まで御連絡ください。電話・ハガキ・FAX・メール何でも結構です。

問い合わせ先:(財)懷徳堂記念会事務局 〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5 大阪大学文学部内

Tel:06-6843-4830、Fax:06-6843-4850

E-mail:kaitokudo@let.osaka-u.ac.jp http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitokudo/

(懷徳堂記念会)

大阪大学の開講する授業科目の受講による職員研修について

本学の常勤職員の資質能力の向上を図るため、職員が自身の教養を深め又は広く専門知識を習得することにより、より高い使命感と働きがいをもってその職務を遂行することができるよう、職員自身が本学の開講する授業科目を担当教員及び上司の承認を得て、受講できる研修制度を設けました。

なお、実施要項は以下のとおりです。

大阪大学の開講する授業科目の受講による職員研修の実施に関する要項

（目的）

第1条 この要項は、国立大学法人大阪大学（以下「大学」という。）における常勤職員（以下「職員」という。）の資質能力の向上を図るため、職員が自身の教養を深め又は広く専門知識を習得することにより、より高い使命感と働きがいをもってその職務を遂行することができるよう、大学が開講する授業科目の受講を可能とする研修制度（以下「職員受講研修」という。）を実施する場合の取扱いについて定めることを目的とする。

（職員受講研修の要件等）

第2条 職員受講研修として、職員が受講できる授業科目は、1年当たり2科目を超えないものとする。

2 職員が受講した授業科目については、単位認定を行わない。

3 職員受講研修を希望する職員は、あらかじめ、職員が受講を希望する授業科目の担当教員及び職員の所属する部局等の上司の承認を得るものとする。

4 前項に定めるほか、職員受講研修について必要な手続き（受講を取り止める場合などの手続きを含む。）は、部局等がこれを定める。

（職員受講研修の取扱い）

第3条 職員受講研修は、勤務時間外に行うものとする。

2 職員受講研修のための時間が職員のあらかじめ割り振られた勤務時間と重複する場合は、国立大学法人大阪大学教職員の労働時間、休日及び休暇等に関する規程第3条第4項（任期付きの職員にあっては、国立大学法人大阪大学任期付教職員の労働時間、休日及び休暇等に関する規程第3条第4項）又は国立大学法人大阪大学シフト勤務等適用職員の勤務時間等に関する取扱い規則第3条の規定により、割り振られた勤務時間を変更することができるものとする。

3 前項の割り振られた勤務時間を変更する場合は、別に定める手続きによるものとする。

4 大学は、職員受講研修については、入学金、授業料その他の費用を徴収しない。ただし、職員受講研修に要する交通費及び教材費等は、職員の自己負担とする。

附 則

（施行期日）

1 この要項は、平成21年1月26日から施行する。

（職員の範囲）

2 当分の間、職員受講研修の対象者は、教員及び研究員以外の常勤職員であって、かつ、職員受講研修終了後も大学で勤務する期間がある者に限るものとする。

（総務部人事課）

女性研究者キャリア・デザインラボの活動

女性研究者キャリア・デザインラボでは、多様な人材活用推進委員会ホームページに、大阪大学で教育・研究に関与する女性研究者（または女性研究者を志望する女性の院生・学生）を対象に、会員制の掲示板「コミュニティ ラボ」を開設しました。一部には、匿名のお悩み相談のスペースも設けました。既に会員数は60名を超えております。また、女性研究者のネットワークを構築するために、毎月数回のランチの会、年に数回のセミナーなどを行っております。イベント情報、コミュニティ ラボのページも随時更新しておりますのでぜひご覧ください。

また、大阪大学の女性研究者の方を対象に聞き取り調査も随時実施しております。大阪大学の男女共同参画にご意見等のある方は、ぜひ調査にご協力ください。

「女性研究者キャリア・デザインラボ」ページ

<http://55099zzwd.coop.osaka-u.ac.jp/diversity/careerdesign>

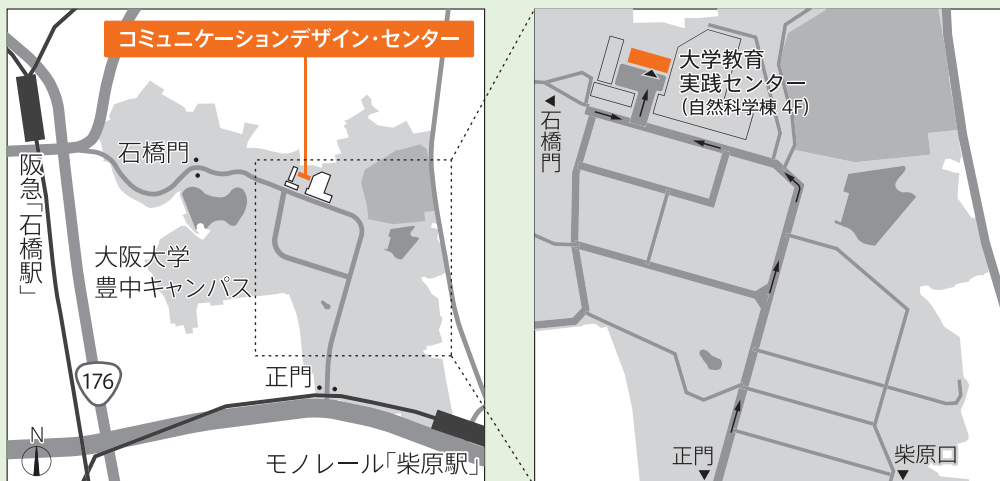
コミュニケーションデザイン・センターが移転しました

大阪大学コミュニケーションデザイン・センターは、平成21年2月18日（水）より、吹田市千里万博公園から、豊中キャンパス内の大学教育実践センター自然科学棟4階に移転いたしました。

移転先住所・電話番号

〒560-0043 豊中市待兼山町1-16

TEL：06 - 6850 - 6111（代表）



アメリカの再生はいかになされるか？

サンフランシスコ教育研究センター長
谷 本 親 伯

2007年4月に当SFセンターに着任した。米国滞在中の最大の出来事が、昨日のオバマ大統領の就任といっていよい。黒人市民権運動の中心となったキング牧師がワシントンDCにおいて行ったあの有名な演説（「私は夢を持っている。いつの日かこの地に黒人の大統領が生まれることを。」）以来、46年にして実現した。意外と早い気がする。これが「アメリカ」であろう。キング師の暗殺数年後に開催されたオリンピックで米国代表選手が、表彰台を独占し、国歌演奏時に右腕を高く差し上げ、人種差別に抗議した場面が思い興される。（メダルは剥奪された。）

就任式に当り、メディアは建国以来の歴史を振り返っている。就任式前に、リンカン大統領にならい、フィラデルフィアから鉄道にてDC入りしたことにもオバマ大統領の思いが感じられる。しかしながら、一方では、オバマ大統領は、「私は黒人の大統領ではなく、米国の大統領である」として黒人色を出さないように配慮していたとも聞き及ぶ。ファインシュタイン上院議員（小生の推測では、彼女が米国最初の女性大統領に選ばれる可能性がある。）の司会の下、式典は進行し、音楽演奏の後、就任演説が始まっている。J.F. ケネディ大統領同様、My fellow citizensと呼びかけ、選挙キャンペーンでの数々の名演説を総括するような高邁な内容であった。この歴史的（本当に歴史を感じる）瞬間をTVの画面を通してであるが、注意深く見守った。式典の最後の聖職者の祈りが「We are the same men. Amen.」で締めくくられた。この部分はまた、不当な人種差別を受け入ってきた（あるいは現在も受け続けている）人達の切実な思いであろう。

さらに、カリフォルニアから眺めると、なんと大統領の周辺は実にCalifornianばかり。式典長ファインシュタイン女史（元SF市長）、ナンシー・ペロシー下院議長が目立つ。シュワルツネッガー知事、ニューサムSF市長らも。やはり、アメリカを動かす力は、カリフォルニアか？お国自慢が過ぎるが、そうであって欲しいと切望する。

いずれにせよ、オバマ大統領は、「アメリカ再生」を訴えた。軍事優先から民生・教育重視に移ることは間違いない。どのようにして実行されるかが問題である。堅固にして、複雑きわまる利権構造社会の中で、オバマの正論が通るか。さて、居住してみると、確かに、アメリカの「凄さ」と「病氣」を実感する。「弱肉強食」は変わらない。新国務長官ヒラリー・クリントンの過去の発言にはこのことが多く感じられる。彼女も、新大統領も職とする「弁護士」業の実体は、行き過ぎている。社会正義や秩序のためではなく、法ビジネスのために法律はあるのかと思わざるを得ないことが多々ある。

金融界、まさに現在の「不況」のきっかけとなったサブプライム・ローンを取り巻く状況は、何故予測出来なかつ

たか強く疑問に思っている。米国でも、日本でも著名な（あるいはメディアへの露出度の高い）エコノミストが色々言及するが、勝手なものである。自分自身は、理系にあって、ユニークに解が得られる世界で生きてきた。社会科学系は、前提条件を同一にできない難しさがああり、ユニークな解が決められない大きな広がりを持つフィールドにあると解釈しているが、それでも、個々の事象に対する解釈は、各自各様、論理的な説明をきくことは稀で、小生には分からない部分が多い。

オバマ大統領の就任に際し、「不景気」対策が当然のこととして論じられている。多くの犠牲者を出したサブプライム問題の報告では、借入者が金融機関に連絡したくても、コンピューターによる自動操作で、多数の窓口を「たらい回し」され、結局、担当者と直接話し合えない事態が示されていた。一度、契約すれば、後は儲けるだけ。小生自身にも痛い経験がある。ケーブルTV・インターネット組み合わせの契約を行っていたが、当初格安だったものがいつの間にか割高になっていたのである。（契約書のどこかに記載されていたのであろうが。）メールサービスに不都合が生じ、これを解約してもパッケージになっているから、全額収めさせ、収めなければ信用機関に報告する。その結果、クレジットカードなどが使用できない致命的な不便が発生するので、まず相手のいうまま支払いをすませないと何も進展しない構図となっている。取り敢えず、会社の都合を最優先したシステムで社会は動いており、この点、日本よりも悪質である。まさに、弱肉強食の「摂れるときにとことん摂っておけ」という方式になる。

十数年前の湾岸戦争や9.11テロを経て、イラク戦争に突入した経緯そして国民（市民？）感情を振り返れば、冷静に状況を見つめ、分析し、そして対応することの難しさを感じる。イラク戦争に突入する直前のパウエル国務長官の心境については、一昨年5月、ミネアポリスにて聞くことができた。（約70年前の山本五十六元帥も然り。）一面だけを論ずるのは易しいが、戦争の背景には、依然として、



夏季一般英語研修

資源・エネルギー収奪の弱肉強食の世界が存在する。

さて、オバマ新大統領の出現が地球環境への取り組みを加速させることを期待している。世界で、資源・エネルギーを一番消費しているのは米国である。こんなに多くの肥満体を見せつけられるのも米国である。「一体どこまで消費すれば気がすむの？」なる本も幾多と出版されている。一方、カリフォルニアが地球環境保全の先導役を務めていることも事実である。この点を論ずれば、紙面はいくらあっても足りない。このような環境の下で、大阪大学が他大学に先駆けてサンフランシスコの地に海外拠点を設けたことは、大変意義のあることである。この拠点での活動内容については、幾つかの機会に伝えてきたので重複して言及しない。

小生の思いでは、他大学のほとんどが知財戦略展開のために拠点を置いているのに対し、「大学教育の在り方と国際交流」を重視したい。そして、地球環境の取り組みについては、自然科学を基とした技術的対応が全面に出てくるが、社会がこれを受け入れ、実行する場合の実行計画については情報が少ない。「文理融合」教育（結局、「教養」）の徹底が最重要であると考えている。そして、これが大学（あるいは大学院）教育のカリキュラムの中でどのように具現化できるか、これを模索している。米国の大学にはこのカリキュラムが無いというのが小生の現在の結論である。反論が出てくることを期待している。そしてこれを大学間連合体で造り上げていくことを強く願っている。当地の大学のパワーを感じれば、大阪大学といえども日本の大学が単独で国際戦略を展開しても対抗できないと痛感せざるを得ない。この背景には、教育・研究での実力だけではなく、運営組織や企画・決断方法に、「日本的弱点」があると見ている。



東北大学との合同フォーラム



JUNBAサミット

当地での会議については、昨年9月中旬に、東北大学との合同フォーラムを開き、息つく間もなく、11月下旬から12月上旬にかけて、臨床医工学連携国際シンポジウム（The 3rd MEI International Symposium: Physiome and Systems Biology for Integrated Life Science and Predictive Medicine）そして12月上旬に第8回大阪大学フォーラム（Bio-Environmental Chemistry）の開催を支援した。いずれも盛況で成功であった。また、シリコンバレーや当地の環境では、多人数を対象とする大会議と共に、数十名程度を対象とする小会議を頻繁に行うことも効果的であると考えられる。当地のネットワークは、日本以上に個人的な理解を重視し、「組織対組織」のコネよりも「人対人」が優先される。実は、カリフォルニアは“大変 Human”な地であるかもしれない。



JUNBAシンポジウム



JUNBAテクノロジーフェア



JUNBAサミット

最後に、センターのあるビルの外観が大きく変わったことを報告しておきたい。2004年の開設以来、全面的な修理工が長く続き、木製の囲いや覆いが付されるなど全貌が分からなかったが、今年になって、やっとそれらしい外観が現われた。Montgomery 街と Sutter 街の角に玄関が移され、広いホールがあり、見違えるばかりである。また、住所表示も 120 から 100 Montgomery に変わる。（当分、100 でも 120 でも取り扱いは同じ。）



改修後のセンタービル



ローマ教皇庁立ペルー・カトリック大学

Pontificia Universidad Católica del Perú



通称 PUCP（ブック）。1917 年、人文学部と法学部からなるカトリック大学としてペルーの首都リマ市に創設された大学（初代学長は枢機卿ホルヘ・デンティラック神父）です。その後、工学部、経営学部、社会科学部、建築学部、教育学部などを開設し、現在では、10 学部を擁する総合大学として、ペルーのみならず、ラテンアメリカでも高く評価されている高等教育研究機関（学生総数は大学院生を含めておよそ 18000 人）となりました。1947 年には、その優れた業績により「ローマ教皇庁立」の称号を教皇庁より授与されました。とくにアンデス研究（考古学・歴史学・文化人類学）の分野では、アメリカ大陸最古の大学であるペルーの国立サン・マルコス大学とともに世界の学界をリードする優れた研究者を輩出し、そのレベルの高さは群を抜いています。

また、教員のみならず学生の国際交流にも積極的で、世界各国から多くの留学生を受け入れ、キャンパス内で学生同士の活発な国際交流が行われています。1987 年には、日本からの資金援助を得て、人文学部に東洋学研究所が併設され、サンパウロ大学（ブラジル）とともに南アメリカにおける日本研究の拠点ともなっています。

ペルー・カトリック大学は、1988 年より旧大阪外国語大学との学術交流協定を結び、教員・学生間の交流を行ってきました。2007 年 10 月の大阪大学と大阪外国語大学との統合を契機に、大阪大学と大学間学術交流協定を締結しました。今後は全学レベルの学生交流・研究交流の発展が期待されます。

ウェブサイト：<http://www.pucp.edu.pe/>

編集後記

大阪大学の源流のひとつである適塾には、当時、全国各地から入門者が集まり、オランダを通じてもたらされる最新の知識や技術を学んですぐれた医学者・蘭学者として全国で活躍しました。本号のクローズアップでご紹介しています「日本語日本文化教育センター」は、世界各国から日本にやってきた外国人留学生等に対する日本語及び日本文化等の教育を行っており、今も昔も大阪や大阪大学が各地から優秀な学生が集まる重要な教育拠点であることを証明しています。

また、ナウススペシャルでは、今年も開催されました「えびす男選び」について実行委員会の方から報告していただいています。今年で 3 回目を迎えるこのイベントは、純粋な競争の場ではなく地域社会との繋がりを強く実感できる場としての意味合いが強いように感じます。地域の方々とともに発展していくことは、大阪大学の存在を広くアピールすることにも繋がっていきます。いまさらながら「地域に生き世界に伸びる」ということばの意味とそのすばらしさを感じます。

（瀬尾）

将棋部

君もスターになろう



今年度、阪大将棋部は立命館大学を倒して12年ぶりに全国大会である学生王座戦に出場し、4位入賞することができました。関西だけで学生将棋参加大学数が30校ほどもあることを考えると、当然ながら全国には数え切れないほどのライバル校がいるわけで、そんな大会でのこの結果はかなり上出来だったと思います。

さて、この王座戦というのは将棋界という世界では極めて有名な大会なので全国の将棋愛好家の方々に「阪大は将棋が強い」と認知されていますが、その実態はどうか。小さな頃から将棋をやっている有段者がたくさんいる、と誤解されがちなのですがそんなことはありません。確かにそういう人もいますが、寧ろ大学から将棋を始めて強くなった人が一番多いのです。入学当初は初心者だった部員が一年で有段者に成長していくのを見ると、どうしてこんなに短期間に強くなれるのか、誰しもが疑問を持つところだと思います。

しかし何も特別な活動をやっているわけではありません。楽しく将棋を指しているだけです。ただ他のどの将棋部より優れていると思うのは部員間の仲が凄く良いこと。他大

学の方に良く言われるのが「阪大は凄く雰囲気が良い」ということです。例えば師弟制度というのがあります。これは、新入生は先輩の誰かに弟子入りするというもので、以後その人のことを師匠と呼び敬わなければなりません。その代わり師匠は弟子に将棋を教えたり、時には食事を奢ったりと何かと面倒をみます。数年前の先輩が作った面白い制度ですが、部内に明るい雰囲気をもたらし、新入生と打ち解け棋力を向上させる今や将棋部になくてはならないものです。一例ですがこのように将棋部はいつも和気藹々とやっています。そして皆で強くなりました。将棋の団体戦には14人制ですが、選手として出ない者も自分が戦っている気持ちになり、選手は出ない者の気持ちも背負って戦います。勝利も敗北も全員で共有して、だからこそ宿敵の立命館大学に勝てたときは最高の気持ちになりました。

これからもこの調子で楽しく行こうと思います。興味を持って下さった方、遊びに来て下さいね。

部長 田中一徳(理2年)

コメント

初心者からプロ、留学生、他大学の方まで遊びに来ます。是非一度訪れて見て下さい。



練習場所：明道館 24号室

練習日時：いつでも好きなとき

部員数：60人程度

連絡先：田中一徳

アドレス kishiya-chuuuouten@docomo.ne.jp

TEL 090 - 7971 - 9095

ECLIPSE Masterclass 開催

大阪大学 21 世紀懐徳堂は、富士通テン(株)との共催により、大阪大学中之島センター佐治敬三メモリアルホールにおいて、12 月 19 日(金)に「ECLIPSE Masterclass “Strings permeate Chords” (イクリプス マスタークラス「弦と絃」)」を開催しました。

「ECLIPSE Masterclass」は、大学、学生、ミュージシャンと富士通テンが企画段階から運営までを共同でつくりあげる、音楽をキーにした文化支援活動として行われたもので、今回は、学生がトップミュージシャンの演奏を聴き、演奏後にはディスカッションを行える機会を提供するとともに、学内インターンシップに参加している学生が企画・立案から運営の一部に積極的に関わることで、専門性に加え、大学と地域に関する総合的知識とコミュニケーション能力を備えた人材育成の重要な教育的機会として開催されました。

プログラムは、杵屋禄宣氏(立三味線)と杵屋宣三氏(脇三味線)に加え、フランチェスコ・ドラツィオ氏によるヴァイオリンとのコラボレーションが実現し、次の曲目による演奏が行われました。

「流れ」 作曲：藤舎呂華泉

勸進帳 より「滝流し」 作曲：四代目杵屋六三郎

無伴奏ヴァイオリンのためのソナタ より「シャコンヌのテンポで」 作曲：B. バルトーク

「鷺娘 ぼかし」 作・編曲：G・カスタニョーリ(原曲：富士田吉治)

「光の弦 波の絃」 作・編曲：G・カスタニョーリ



当日は、教職員、本学学生の他、他大学学生及び一般の方が多数参加し、大学院文学研究科伊東信宏准教授の司会により進められ、演奏終了後には鷺田清一総長のコメントをいただきました。なお、質疑応答でのドラツィオ氏の通訳は大学院言語文化研究科大学院生の正戸あゆみさんが務めました。

(21 世紀懐徳堂)

阪大 NOW No.109 2009 2月号

2009 年 2 月 20 日 発行

編集・発行 大阪大学総務部評価・広報課広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL: 06(6879)7017 FAX: 06(6879)7156
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大 NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail: soukousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp